インフィニット・ストラトス～緋色の弾丸と白の騎士

チキン執事

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス～緋色の弾丸と白の騎士

【Ｎコード】

Ｎ６４１６Ｘ

【作者名】

チキン執事

【あらすじ】

遠山キンジ、ＨＳＳという不思議な力を持った彼と、織斑一夏、唐変木で鈍感なフラグ乱立魔の彼が織り成すクロスストーリー。

頑張って書いていこうと思いますのでよろしくお願い致します。

始まりの始まり（前書き）

一週間悩んだ結果。のコレです。

もうひとつの方も頑張らせて頂きますのでよろしくお願い致します。

始まりの始まり

「キーンジ！」

チュンチュンと、小鳥のさえずりが聴こえるなか、その声が聴こえた。

とても幼いアニメ声、そちらを向いてその声の主を見てみると、なんと言うか声相応の身体のサイズをした小学生……じゃないか、高校生が立っていた。

「……おはよう」

その人物の名は、神崎・H・アリア。

そんな小さく幼い風貌の彼女だがこいつは双剣双銃（カドラ）のアリアと呼ばれていて、武偵からは期待の眼差しで、犯罪者からは狙われたら終わりの人物として呼ばれている。

「あれ？アンタ元気無いわね。どうしたの？」

「……あぁ、そうだよ元気ないよ。どっかの誰かさんに夜中急に呼び出されて自主練させられなきゃきっと……いや、それでも無理か……」

そう。もし、それがなくなったとしても俺の元気が戻ることは到底ないであろう。

理由は簡単。

俺が今から向かうところだ。

「まぁ、アンタみたいなのが、『アレ』を使えちゃうなんてねぇ……。あれ？何人目だっけ」

「二人目だよ」

それをいってまた、心が黒く荒む。

あーー今すぐにでも帰りたい。

武偵高に愛着が沸いたのなんて初めてかもしれない。

そう、俺はもうしばらくは武偵高に行けないんだ。

俺が、あんなものを動かしてしまったせいで。

インフィニット・ストラトス。

通称、ＩＳ。

あれが、あの事件が全ての始まりだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ガウン、ガウン！

無機質に響く、空調の音。

あまり広いとは言えない輸送貨物庫の中、俺達は居た。

――最新兵器と共に。

俺達、バスカービルのメンバーはとある任務を受けていた。

その任務とは、

『ＩＳを死守せよ』

という単純明快、なおかつレベルのすこぶる高い任務であった。

……俺からしては、だが。

ＩＳ、と言うのは正式名称『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。

しかし『製作者』の意図とは別に宇宙進出の目処は一向に立たず、無駄にスペックをもて余した機械は『兵器』へと変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』へと落ち着いた――所謂、飛行パワードスーツだ。

そして、コレには決定的な欠点がある。

それは、

『女性にしか動かせない』

だ。どんな欠点だよ。ってなるだろ？

そう思った偉いやつが嘘だと思ってＩＳに触れてもホントに何も反応が無かったらしく、その事は証明されてしまったとかなんとか。

そして今、その兵器のせいで世界のバランスは崩れつつある。

それは、女尊男卑。

まさに昔とは真逆。女が有利なこの社会。

まぁ、その世界バランスを崩している兵器の護衛を今、俺達はやらされている訳だ。

「ねぇキーくん。理子気持ち悪ぅい……」

隣に居た自分を理子と名乗る女の子。

こいつの名は峰　理子。

普段はおどけた感じで意味のわからん単語を連呼しているが、本気になるとマジでヤバい。

てかおい、吐くなよ？

「きゃっ、何するの！？もう！抱き付かないで！抱きついて良いのはキンちゃんだけなの！」

うん。それはそれでおかしい事に気が付け白雪。

あぁ。この巫女さん姿の彼女は、

星伽白雪。星伽神社という所の巫女で俺の幼馴染みだ。

……暴走癖のある、な。

「白雪さん、理子さん落ち着いてください。音を聞き分けづらくなります」

そう言葉を発したのは、レキ。

彼女はレキ。一部では感情が無さそうと言うところからロボット・レキと呼ばれている。

そんな彼女は狙撃科のSランク武偵。

貴重な戦力の一人だ。

「な、なぁトオヤマ。こんなんで大丈夫なのか？」

困惑。といった表情でこちらを見るのはエル・ワトソン。

彼女……いや、彼は衛生科なのだが、出来るだけ人員を多くしてほしいという願望のもと、ワトソンも共に、ということになった。

そして最後に、

「あーーー！！もう！うるさいうるさいうるさい！！アンタら黙んないと風穴！」

……こいつはもう言ったはずだよな。

ピンク色のツインテールでももまん好きの彼女。

神崎・Ｈ・アリア。そのひとである。

コレが、俺達バスカービルメンバー。

多分、いや殆どの確率で、失敗は無いだろう。

――そう思ってた時期が、俺にもありました。

結果？…あぁ結果ね。大丈夫。

確かに敵は来たんだが、

敵が持っていたのは、グレネード、ＵＺＩ。

敵の数は５人。

まずアリアと理子と白雪が全線に出て、その後ろでレキが援護射撃。

ワトソンは中距離からの射撃で俺の出る幕もなく、あっさりと終わってしまった。

だが、そこで俺はやらかしてしまった。

ＩＳに、女性にしか動かせない欠陥兵器に、

『触れてしまった』

その時、俺の頭にキンッ……という音が聴こえ、様々な情報が流れ込んできた。

『ＩＳ』の基本動作、操縦方法、性能、特性、現在の装備、可能な活動時間、行動範囲、センサー精度、レーダーレベル、アーマー残量、出力限界、ｅｔｃ．　……。

まるで元々知っているかの様に、理解ができる。

そして視覚野に接続したセンサーが直接意識にパラメーターを浮かび上がらせ、周囲の状況が数値で知覚できる。

「って……まてまてまて！！何なんだ？」

動いてる。

『女性にしか動かせない欠陥品が男によって動かされてしまっている』

その事実。

肌の上に直接何かが広がっていく感触――皮膜装甲展開、……完了。

突然身体が軽くなる無重力感――推進機正常作動、……確認。

そこまで確認して、ひとつの声が、

「あ、あんた、そ、ソレ……」

驚愕に見開いた赤い瞳が、何とも印象的だった。

「……ンジ、キンジ！」

「はっ！！」

アリアの呼び声で現実に戻る。

どうやら軽く現実逃避をしていたらしい。

いかんいかん、気を付けよう。

「……キンジ、アンタ大丈夫なの？」

呆れたような表情でこちらをのぞきこむアリア。

「大丈夫、だと、思いたい……」

「はぁ、ほら着いたわよ、『ＩＳ　学園』」

ここは、　ＩＳ学園。名の通り、ＩＳ専門の学校だ。

それを確認して、深いため息が出る。

「……最悪だ」

その理由はとても簡単。

ＩＳは、女しか使えない。

その意味をご理解いただけたか？

つまり、この学校には、女しか居ないのだ。

何？天国？死ね。俺からしては地獄なんだよ。

俺には、ＨＳＳがあるから。

ＨＳＳ。――ヒステリア・サヴァン・シンドローム。

性的興奮を得ることによって、超人的パワーを得ることが可能。

つまり、『異性』に興奮をすることによって得られるもの。

この力が今までどれだけ俺を苦しめてきたか……。

よし、止めよう。これ以上考えていたら胃に穴が開く。

「あぁ、アリア。ここまで送ってくれてありがとな。じゃ」

出来るだけ笑顔でそう言うと、

「は？何言ってんの？あたしも入るのよ」

……さらっと、

さらっととんでもない事言い始めましたよこいつ……！

「アンタねぇ…自分の立場分かってる？今や『世界で二番目にＩＳを起動できた』男なのよ？護衛の一つや二つや三つや四つや五つ付いてもおかしくないわよ」

「いや、それはおかしい。てかＩＳを起動できた男なんて俺以外にいたんだ……」

おぉ嬉しい嬉しい。

これで俺がパンダになる確率が５０％減ったな。

「ほら、そんなことより、早くいくわよ」

アリアは俺の前を早歩きで歩き、目の前にそびえる学園へと足をふみいれていった。

始まりの始まり（後書き）

はい。どうも。

誤字、脱字、感想なども送ってくれると嬉しいです。

これからもよろしくお願い致します。

二人目の（前書き）

二回目の投稿です。

二人目の

一夏ｓｉｄｅ

今日は高校の入学式。

新しい世界の幕開け、その初日。

それ自体はいい。むしろ喜ぶべきところだ。

だがしかし、問題はとにかくクラスに男が俺一人という点だ。

（これは……想像以上にきつい……）

ナルシスト発言とかではなく、本当にクラスメイトほぼ全員からの視線を感じる。

大体、席も悪い。

なんで真ん中＆ａｍｐ；最前列なんだ。

めちゃくちゃ目立つ上に否が応でも注目を浴びるじゃないか。

俺は、ちらりと窓側の方に目をやる。

「……」

何かしらの救いを求めての視線だったんだが、薄情なことに幼馴染みの篠ノ之箒はふいっと窓の外に顔をそらした。

何てやつだ。これが六年ぶりに再会した幼馴染みに対する態度だろうか。……もしかして、嫌われてる？

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ！？」

うおっ、いきなり大声で呼ばれたから思わず声が裏返ったぞ。
案の定、女子特有のクスクス声が聞こえてきて更に落ち着かなくなって来た。

別に俺は女子に対する苦手意識はない。
ないけど、でも限度ってものがあるだろう。

ラーメン好きだって毎日三食ラーメンだったら飽きるだろ？。

いや、わからんけど。

俺そこまでラーメン好きじゃないからなぁ……って、そういう話じゃない。

とにもかくにも、クラスで男子は俺だけ。

他の生徒二十九名が女子。

副担任も女性。担任は……知らないけど女性らしい。

らしいというのはまだ顔を見ていないから。
一体何してるんだろうね。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今、『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

気が付くと副担任の山田真耶がぺこぺこ頭を下げていた。
しかしあんまり頭を何度も下げるので、微妙にサイズのあっていなさそうな眼鏡がずり落ちそうになっている。

というかこの人はホントに年上なのだろうか？同い年と言われれば普通に受け入れてしまいそうだ。

「いや、そんな謝らなくて、大丈夫ですよ？自己紹介、しますから」

「ほ、本当に？本当ですか！約束、ですよ！？」

がばっと顔を上げ、俺の手を取り、熱心に詰め寄る山田先生。

……あの、またすごい注目を浴びてるんですが。

しかしまぁすると言った以上、引くわけにはいかない。
ここで溝を作ると二度とこの環境には馴染めないと見た。

しっかりと立って、後ろを振り向く、

（うっ……）

今まで背中に感じていただけの視線が一気に俺に向けられているのを自覚する。

さっき薄情にも俺を見捨てた箒ですら横目でこちらを見ている。
流石にこんな風に注目されると、いくら女性に苦手意識のない俺でも――いや、この話はもういい。

「えー……えっと。織斑一夏です。よろしくお願いします」

儀礼的に頭を下げて、上げる。――ちょっと待て。なんだその、『もっと色々喋ってよ』的な視線は。
そしてこの『これで終わりなわけがないよね』的な空気はなんだ。
……別に喋ることなんてないんだが、ほら、趣味とかも別に聞いてほしいわけでもないし。
あ～。箒、助けてくれ…ってうわ、目を逸らされた。

（いかん。まずい。ここで黙ったままだと『ネクラ』の称号をいただいてしまう）

俺は一度息を吐き出し、新しい空気を吸い込み、ひとつの言葉を紡いだ。

「以上です」

ガタタッ。思わずずっこける女子が数名いた。
どんだけ期待してるんだよ。無茶いうな。

「あ、あのー……」

背後からかけられる声。涙声成分が2割増ししている。え？あれ？
駄目でした？

パァンッ！いきなり頭を叩かれた。

「いっ――！？」

痛い、という無脊椎反射より、あることが頭をよぎった。

この叩き方――威力といい、角度といい、速度といい、とある人物――よく知っているとある人物と同じような感じ何ですが……。

「……」

おそるおそる振り向くと、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身。よく鍛えられているがけして過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。狼を思わせる鋭いつり目。

「げぇっ、関羽！？」

パァンッ！

また叩かれた。ちなみにすっげぇ痛い。
音もでかいから女子が若干引いている。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーン低めの声。俺には既にドラの効果音まで聞こえているんですが、はて。

――いや、しかしまて。何で千冬姉がここにいるんだ？職業不詳で月一、二回ほどしか帰ってこない俺の実姉は。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな。それと、『アレ』と丁度あったんでな。つれてきた」

おお、俺の聞いたことが無いほどの優しい声。……てかアレってなんだ？何を連れてきたんだ千冬姉は。

「い、いえ！副担任ですからこれくらいは当然です！」

さっきの涙声とは打って変わって若干熱っぽい位の声と視線で担任に答えた。

「諸君、ワタシが織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私のいうことをよく聞き、よく理解しろ。出来ないものには出きるまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは絶対に聞け。いいな」

なんという暴力発言。間違いなくこれは俺の姉・織斑千冬。

しかし聞こえたのは困惑のざわめきではなく、黄色い歓声だった。

「キャーーー！！本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れて来たんです！北九州から！」

いや、別に南北海道でもいいけどさ。

「あの千冬様にご教導頂けるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様の為なら死ねます！」

きゃいきゃいと騒ぐ女子たちを、千冬姉はうっとうしそうな顔で見る

「……毎年、よくもここまで馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それともなにか？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

これがポーズでなく、本当にうっとうしがっているのが千冬姉だ。

もう少し優しく接すれば良いのに。

「と、まぁ、ある程度紹介も終わったところなんだが、まだ紹介していないものが約5名いる。入ってこい」

そう言った千冬姉の後に教室のドアが動き――。

そこで、みんなの動きが、止まった。

入ってきたのは、ピンク色の髪をした、小柄な女の子、そして、に薄い青色の髪をした無表情な娘、日本人特有の真っ黒な髪の毛の娘、そして服装が、何て言うんだろう…フリル？がたくさんついた服を身にまとった女の子とそして――――。

ＩＳ学園の制服をまとった、『男』だった。

二人目の（後書き）

次の投稿あたりでセシリア戦の話に持っていけるといいナ……。

似た者同士（前書き）

二日連続投稿！

これからも頑張ります！

似た者同士

キンジｓｉｄｅ

ザワザワ……。

周りが静かになった後、また周りの皆がざわつき始める。

「お前ら、挨拶しろ」

というえーっと……織斑…だったか？先生の声でレキが動き出した。

「私の名前はレキです。名字はありません。キンジさんの護衛として武偵高校からきました。実際は二年生ですが別に敬語は使わなくて結構です」

その紹介が終わると周りの女子が少し騒ぎ出す

『あ、あの娘可愛い』

『えー？私はピンクの髪の娘がいいと思うけどなぁ』

「んんっ！！ゴホンゴホン！」

そのざわつきをおさめるためか、織斑先生がわざとらしく咳払いをする。

そしてそのまま、此方に目をやり、目で

『続けろ』

と語ってきた。

すると理子が、

「皆さん始めましてぇー！理子の名前は峰理子でぇーす！好きなものはギャルゲーだよ！あだ名は理子ちゃんでも、りこりんでも、なんでもいいからね！あ、あと理子もキーくんを護衛するためにここにきましたぁ。みんな仲良くしてねぇ！！それと私もタメ口でＯＫ！」

と、明るく自己紹介をしたお陰か周りが理子を見る目が明るい。

こいつはどこでも直ぐに慣れるな。

そして次に、

「え、えっと、わ、私の名前は、星伽白雪と、言います。ここにきた理由は、レキさん達と一緒です。ＩＳ関連以外のことなら気軽に何でも聞いてください！」

そういい終わるとすごい涙目でこちらを見てきた。

おお、わかるわかる。

きっと心の中では『きんちゃーん！？助けてぇ～』とか喚いているのだろう。

よくやった。お前は頑張ったよ白雪。

さて、お次は――、

「私の名前は、神崎・H・アリア。東京武偵、Sランク武偵よ。私がここに来た理由は、キンジを護衛するため。それじゃいちねんよろしゅきゅ……」

噛んだ……。

あのばか、噛みやがった。

ヤバイ、ここで誰かが笑ったりしたら……。

『あ、あんたら全員風穴ぁ！！』

ズガンズガンズガンズガン…！

あわわわわわ……！

簡単に想像できてしまうところが更に怖い。

どうなる……と、思っておそるおそる前を見ると、

「キャァーーーー！」

何て言う黄色い歓声が聞こえてきた。

『アリアちゃん！？アリアちゃんって呼んでいい？』

『ねぇねぇねぇねぇ！今夜暇？じゃなくてこのあと暇！？』

おい、こいつ危ないぞ。

「えっ？えっ！あっ！」

予想外の反応にパニックじょうたいに陥るアリア。

だよな、こいつ友達付き合いとか苦手であまり人と話さなかったもんな……。

ってなんだ？お前が言うなだと？

「ちょっ。き、キンジ！あんた私のこと助けなさいよ！」

うわっ。こっちに振るなよ……。あーー皆の視線が一気にこちらに。

やるしかないのか……。

「……えっと、俺の名前は遠山キンジです。はい……」

シーン。

な、なんだこのまだ終わりじゃないだろ的な視線は。

く、くそっ。なにか…言うことは……！

俺は一つの決断を下す。

ふぅ…。と、短く息を吐き、言葉を発する。

「以上です」

ガタタタッ！！

おわっ！？椅子から女子が何人か落ちたぞ。

ん？織斑先生も何か呆れている。

何があったんだ？

そう思った時だった。

「はいっ！質問」

と、女子の声が聞こえてきた。

「な、何ですか？」

やはり女子がほとんどという環境には馴れない。

まぁ人一倍馴れないっていうのもあるがなんかこう……居づらい。

「あの、なんで、ニュースで報道されなかったんですか？」

「それは、動かせたのがつい最近でニュースにする間もなかったからです」

他にも質問されたができる限りのことを答え、ようやく俺は解放された。

「さぁ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

え？……何なんだ？この鬼的な教育指導は。

ほら、あそこの男子だって顔ひきつらせてるぞ。

「ほら、早く席に着け、馬鹿共」

先程織斑？が頭を出席簿で叩かれていたのを思いだし、急いで席についた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「…………」

これは、結構キツいぞ。

一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わった休み時間。

けれど、この教室内の異様な雰囲気はいかんともしがたい。

（あー…つらい）

俺と織斑以外は全員女子。しかもそれはクラスだけではなく学園全体が。

そして、このクラスにしか男子がいない。

すると当然――

『ちょっと狭いんだけど！どいて！』

『貴方が退きなさいよ』

なんて感じで廊下に他のクラスの女子や多分他の学年であろう女子達が群がっているわけである。

「はぁ…」

思わず出てしまう溜め息。

マジでキツいぜ。

「な、なぁ遠山……先輩？でしたっけ」

そう言って俺の目の前に現れたのは、織斑だった。

「あぁそうだけど、何か用か？」

「いや、用って訳じゃ無いんですけど。その……こんな環境なんだし、仲良くしたいなぁ…と、思って……」

苦笑いしてそう答える織斑。

そっか、だよなぁ…こいつも男。この環境には馴れないよな。

「あぁ、そっか、だよな。分かったよ。さっき自己紹介でも、言っておいたが遠山キンジだ。遠山でも、キンジでも好きな方で呼んでくれ。あ、俺は一つ上だけど先輩はつけなくていいぞ。歳が上でもクラスは一緒だしな。その方が呼びやすいだろ？」

「あ、はい。よろしくお願いしますキンジさ……キンジ。えーっと、おれは織斑一夏……です。キンジの呼びたいように呼んでくれ。……んで一応あそこの鬼教官の弟だ」

すこしまだ、敬語の混ざったしゃべり方。まあそんな簡単には使えないよな。年上にため口なんて。

あ、同じ名字だと思ったらそう言うことだったのか。

「わかった。宜しくな、『織斑』」

「こちらこそ、だ『キンジ』」

あ、ついに吹っ切ったらしい。

まぁそんな軽い挨拶を交わした後に回りを見ると――。

「フフ腐……織斑君×遠山君…じゅるり」

「……んじゃ、席に戻るわ」

「おう、んじゃな」

その呟きのせいで俺達の周りの視線が一気に変わり、ちょっと一緒に居ずらくなってしまったので、一旦俺達は別れることにした。

あれ？離れた瞬間誰かが織斑に話しかけた。

あのポニーテールの娘だれだろう。

まぁ、後で織斑に聞けば良いことか。

俺はそんな疑問を放棄して、残りの休み時間を堪能するために、机に突っ伏した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「――であるからして、ＩＳの基本的なうんようは現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ　を運用した場合は、刑法によって罰せられ――」

すらすらと教科書を読み進めていく山田先生。

結構内容的には難しいが、昨日から予習しておいた甲斐があり、なんとか授業には追い付いていた。

ふと、織斑が気になりちらっと織斑の方を見てみると……。

「…………！（ダラダラ）」

うおっ、汗がすごいことになってる。

「お、織斑君。何か分からないことはありますか？」

どうやら山田先生が織斑の様子がおかしいことに気が付いたらしく、そう織斑に聞いた。

「あ、えっと……」

「いいんですよ。私は先生なんですから聞いてください！」

おお、頼もしいなあの先生。

「分かりました」

織斑も、分からないところを聞くらしく顔を上げた。

そして織斑は――。

「ほとんど全部分かりません」

きっぱりと、そう言った。

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

さっきまでの自信はいずこへ。

山田先生の顔は困り度百パーセントでひきつった。

「あ、あの……ついでに遠山君は分からない所ありますか？」

「……いえ。昨日から予習しておいたので、何とかついていけてます」

俺は素直にそう返す。

「……織斑、入学前に渡した参考書は読んだか？」
教室の端から少し怒気を孕んだ声でそう聞く織斑先生。
うおっ…怒った時のアリア並みに怖えぇ。
「古い電話帳と間違えて捨てました」
スパァン！
「必読と書いてあっただろう馬鹿者」
……おい。理子が微かに震えている。
笑いを堪えているんだろう、
てか良い音。俺のベレでもここまでの音はでない。いったいどんな腕力してるんだ？
「後で再発行してやる。一週間で覚えてこい」
「いや、一週間であの分厚さはちょっと……」
「やれ、と言っている」
ギロリ、と織斑を睨む
「……はい、やります」
「ＩＳはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。

そういった『兵器』を深く知らずに扱えば、必ず事故が起きる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚えろ。そして守れ。規則とはそう言うものだ」

……正論、だな。

でも、言わせてもらうと俺は別にここにいたくているわけではない。帰れるものなら帰りたいよ、武偵高校じゃなくて普通な日常へ。

「……貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』と思っているな？」

ドクンッ。と心臓が跳ね、前を見るがその言葉はどうやら俺ではなく織斑に向けられているものだった。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」

……まぁ、言ってることは正しい。

「……」

「え、えっと、織斑君。分からない所は授業が終わってから放課後教えてあげますから、頑張って？ね？ねっ？」

「あ、はい。じゃあ放課後、宜しくお願いします」

それだけ言って織斑は席についた。

はぁ、大丈夫何だろうか？

ここでの生活はできれば安泰でいきたい。ここでも硝煙の香りを嗅ぐのはまっぴらだ。

俺はここでは、目立たず精神（つまりはネクラ）を全うすることをここに決意。

……だがしかし、そんな決意もこのあとあっさり壊れてしまう。

いや、壊れさてしまう。

俺の平和な、日常は。

似た者同士（後書き）

あぁ、ぐたぐた。

ちょっとマジで頑張らせて頂きます

典型的女尊男卑（前書き）

第４話です。

あの後書きには私からして大切な事を書いているのでよかったら見てください！

ではどうぞ！

典型的女尊男卑

「ちょっと、宜しくて？」

「へ？」

「ん？」

二時間目の休み時間。お互いの苦悩を語り合ってた俺達の前に、ある人物が現れた。

そう話し掛けてきたのは、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。

白人特有の透き通ったブルーの瞳が、ややつり上がった状態で俺たちを見ていた。

あー…ダメだ。こういう女子は何かダメだ。

ほら、いかにも『今の』女子といったオーラを醸し出している。

今の女子は、『ＩＳ』のお陰で皆が天狗だ。

女＝偉い。という非論理的方程式が、今のよのなか適応されてしまっているのだ。

まぁ実際、腰にてを当てた様子が随分様になっているようなので本当に偉いのかもしれないが。

「聴いてますの？お返事は？」

「いや、聴いてるけど…何の用だ？」
織斑がそう答えると目の前の女子はわざとらしく声をあげた。
「まぁ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないのですか？」
「……」
完全にあってた。俺も酔狂に探偵科にいた訳ではないらしい。
……別に嬉しくはないが。
「悪いな。俺、君が誰か知らないし」
おう。だよな。もし有名人とかだったらもうちょっとましな対応をしていたよ。俺は。
「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」
……ごめん、知らない。
「あ、質問いいか？」
と、急に織斑が手を挙げた。
「ふん。下々のものの質問に応えるのも貴族の務めですわ。宜しく

てよ」

「代表候補生って、何？」

がたたっ。聞き耳立てていたであろう女子が何人もずっこけた。

仕方ない。俺も軽くずっこけかけた。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

おお。すごい剣幕。まぁアリアには負けるがな。

「おう。知らん」

さらっとそう言う織斑。

「あの、なぁ？織斑。代表候補生っつーのはある程度凄くて頭よくてまぁ、部類的には『エリート』な人間がなれるものなんだよ。ほら、なんか名前的に分かるだろ？」

「そう言われてみればそうだな」

「そう、エリートなのですわっ！」

あ、無駄な事言っちまったらしい。

ビシッと俺達に向けた人差し指が、鼻に当たりそうな位近かった。
「本来ならわたくしのような選ばれた人間と同じクラスと言うだけでも幸運なのですわ！その現実を理解していただけます？」
「ふーん？なぁ、キンジ。それってどれくらいラッキーなんだ？」
こっちに振るな。まぁ――。
「朝の星座占いの一位位じゃないか？ついでに俺は今日一位だった」
「うわっ良いなあ。俺なんて今日――」
「ちょっと聴いてますの！？」
バンッ！と机を叩かれ意識がそちらに向く。
「大体、貴方達みたいなＩＳの知識もろくにない方々がよくこの学園に入れましたね。世界にたった二人の男性ＩＳ操縦者と聞いてましたけど、期待外れてしたわ」
む。今のはイラッときたぞ。
「……俺に勝手な期待を抱かれても困るんだけど」
「ふん。まぁでも？わたくしは優秀ですから、貴方のような人間にも優しくしてあげますわよ」
ほう、これが優しい奴の態度なんだな始めて知った。

「ＩＳの事で分からないことがあれば、まぁ……泣いて頼まれたら教えてさしあげてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

へぇー……え？

「なぁ、セシリア…さん？それってＩＳ動かして戦うやつか？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あ、それなのか。俺、倒したぞそれ」

「ん、織斑も倒したのか」

「も、ってことはキンジも倒したのか。てか俺の場合は突っ込んできたのを避けただけなんだけどな」

「そうなのか。俺の場合は相手がかなり油断してたからな。油断したところに叩き込んだ」

「貴方達！さっきからわたくしを無視するのを止めなさい」

また強く机を叩き自分の存在を主張するオルコット。正直かなりめんどくさい。

「と、というか教官を倒したんですの貴方達！？」

目をかっぴらいてそう言うオルコット。

そんな驚くことなのか？教官自体本気は出して居なかったしかなり

弱――いや、そうだな。俺はこの頃戦闘馴れしすぎたんだろう。
うわっなんかやだなそれ。
「わ、わたくしだけだと聞きましたのに……！」
「女子だけってオチじゃないのか？」
あ、とどめ指した。
「つ、つまり、わたくしだけではないと」
「そういう……事に、なるな」
キーンコーンカーンコーン。
そこを割りこむように飛び込んだ音は三時間目の予礼を意味するチャイム。
ふぅ、助かった。
「っ……！また後で来ますわ！逃げないことね！よくって！？」
よくない。何て言える空気じゃないだろう。
ほら、織斑だって苦虫を噛み潰したような顔になってるし。
「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違って、山田先生ではなく織斑先生が教壇に立っている。

余程大切な話でもあるんだろうか？

「と、その前に再来週行われるクラス対抗戦にでるクラス代表を決めなければいけないな」

は？なんだって？クラス対抗戦？クラス代表？

「クラス代表者、はそのままの意味だ。普通の学校で言う委員長だ。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年変わらないからそのつもりで」

ざわざわと周りが色めき立つ。

まぁ、つまりは戦うためのクラス代表を決めろよってかんじだろ。

ＯＫＯＫ。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

あ、織斑の名前が…。

「あ、私もそれが良いと思います！」

あー…まぁ、俺以外がなるんだから良いか。

悪いな織斑。人間、犠牲はつきものだよ。

「わ、わたしはバカキンジを推薦します。あっでもこれはキンジの

力量を試すためであって別に……」

……ちょっと待て。

「私はキーくんがいいと思うなぁ～」

……ん？

「珍しく気が合うね泥棒猫なのに。わたしもキンちゃんが良いと思いますっ！」

……んん？

「私もキンジさんを推薦させていただきます」

ちょっ！レキまで！？止めてくれ！俺は普通にしてたいんだ！

「「ちょっ、ちょっと待ってくれよ！（下さい！）俺はそんなのやらな――」」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟しろ」

「「い、いやでも――」」

なんとか抗おうとする俺達を甲高い声が遮った。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

また、バンッ！と机を叩いて自己アピール。

何なんだ？机を叩くのが趣味なのだろうか？オルコットは。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんて、良い恥さらしです！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

さっきは大人の対応で何とか我慢したが、ここまでくると口が出そうだ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表をするのは必然！それを、物珍しいからという理由で極東の猿――」

と、そこまで言って、オルコットは黙った。

――否、正確には、黙らされた訳だが、

二つの拳銃と一つの刀と一つのドラグノフと一つのナイフによって。

「極東の猿――が、なんだってぇ？オルオル？」

これは理子。てかオルオルって……。

「私のパートナーを極東の猿扱いする訳じゃないでしょうね？だったら風穴」

でた。伝家の宝刀、『風穴』

「キンちゃんをバカにするなら……殺すよ？」

おおぉぉい！？ヤバい。誰か白雪を止めろぉ！

「この距離なら貴女の心臓と脳を貫くことは可能です」

……一番こいつを止めてくれ。

「ひっ……！ひぃ」

どうやら腰が抜けてしまったらしい。

まぁ、良いきみだ。

「悪いな。オルコット。おい、お前らちょっと流石にそれは……」

そういうと四人は顔を見合わせて、武器を下げた。

「んで思ったんだが、あんたは俺の事極東の猿扱いをしたがすると目の前に存在する織斑先生も猿扱いしたことになるしＩＳ　を作った篠ノ之博士の事を猿扱いしたことになるが」

「うっ……それは……」

そういうと織斑が

「てかイギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一不味い飯で何年覇者だよ」

お、いうなぁ織斑も。

改めてオルコットの方を見ると口をパクパクさせている。

水を失った魚の物真似か上手い上手い。

「けっ！決闘ですわ！」

おおう決闘とはまた面白いことを。頑張れよ織斑。俺は知らん。

「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい。な、キンジ」

「頑張れよ～織斑～」

「いつの間にそんな遠くへ！？てかお前も決闘申し込まれてんだよ！」

知らない。俺はなんも関与してないんだ……！

「言っておきますけど、貴方『達』わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

その言葉を発した瞬間、アリアが鼻で笑った。

「フッ。オルコット。あんた心得ておきなさい。そこの織斑についてはどうでも良いけど、キンジは――私の奴隷だから無理よ！」

ズビシ！と指をオルコットにむけら犬歯を剥き出しにしてそう言った。

そしてその一言により、

「アリア！貴女まだ『私』のキンちゃんとそんな事を！」

「私のって何よ私のって！いいの！キンジは私の奴隷なの！」
「とかいってぇ～アリアちゃんはキンジ君の事がぁ～」
「りっ、理子！それ以上言ったら風穴空けるわよ！」
「へぇー？空けれるのかなぁ？……やってみろよアリア」
いきなり裏理子になった理子がアリアを挑発する。
てかちょっ……！までお前ら！
言わずもがな、やはり武偵校の生徒。
瞬時に武器を出しやがる。
戦ってないのはレキだけ。ってお前も悠長にドラグノフの整備してないで助けろよ。
「貴様ら――」
と、そこに聞こえたのは少し低めのトーンの女の声。
そして背中にビシビシと当たる何かは殺気とは違うがすごい怒気、と言っても過言じゃないだろう。
パァンパァンパァン！
決して銃声では、ない。立て続けに三回鳴ったこの音は、織斑先生のもつ出席簿からなったもの。

ほら、アリアも白雪も理子も涙目になっている。

す、すげぇ織斑先生。あのカオスな空気を一瞬で鎮めた……！いや、沈めた。

よし、これからはこういうことになったら織斑先生に電話しよう。そのために電話番号交換しなくては。

ふと、周りをみると今のやり取りで呆気に取られてしまったらしい。どうしよう。

「……あー！んんっ！では、クラス代表を決めるために織斑、遠山、オルコットで戦ってもらう。最初はオルコットと遠山だ。いいな？」

「んなっ！？そ、そんな俺は――」

「では授業に戻るぞ。神崎、星伽、峰は席にもどれ、では再開する」

俺の話しは完全にスルー。

結局俺は戦う事になったらしい。

あー目立つだろうな…。駄目だ。過去に戻りたい。

そんな俺は現実逃避することしかできず、結局、初ＩＳ学園は陰鬱な状態で幕を閉じた。

典型的女尊男卑（後書き）

えーとですね。

実はキンジのＩＳがまだ決まって無いんですよ。

で、よかったらなんですが案やオリジナルＩＳを書いてくれると嬉しいです。

宜しくお願い致します。

どうしてこうなった。（前書き）

すいません！投稿遅れました！

１２時に出そうと心掛けて居たのですが……。

今日だけ教師の目が厳しく執筆できませんでした！

そして、サブタイトルについては気にしないで下さい！

では、どうぞ！

どうしてこうなった。

……結局、あれから何にもなく、クラス代表を決める戦いの当日となってしまった。

何？部屋割りの所を端折るなだって？

ハッ。おいおい何言ってんだよ。

当然、俺と織斑が部屋割りに、

なるはずだったのに……！

「ねぇキンジ！私のタオル知らない？」

そう言って、『部屋』の奥から出てきたのは、アリア。

いやぁまてまて。こうなったのは理由があるんだ。

そうだ。あれはオルコットにぶちギレられた日の放課後だったな……。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「はぁ……」

放課後。
俺はあの時からの陰鬱な空気を取り払うことは出来ず、窓の外を見てはため息を吐いていた。
あぁ、俺もあの鳥みたいに空を飛べたらなぁ。
俺の現実逃避レベルは更にアップしていた。
はぁ、もうどうしよう。周りからの目もキツいし。
いくら現実逃避しているとはいえそこは武偵。
人の視線とかには敏感なんだ。
ドアの外をみるとバスカービルのメンバーが女子と話しながらこちらをチラチラと見ていた。
ふと気が付けばもう時計の針が４半をさそうとていた。
いかんいかん。もう帰ろうか。
そう思い、机の横に掛けたカバンをとり、席を立つ。
そして部屋を出ようとしたときだった。
「ああ、遠山くん。まだ教室に居たんですね」
「はい？」
呼ばれて顔を上げるとそこには山田先生が書類片手に立っていた。

「あの、何か……用でも？」

そう聞くと、山田先生は

「あぁ、はい。えーっとですね。寮の部屋が決まりました」

そう言って渡されたのは、番号のかかれた紙と、何かの鍵。

えーっと。取り合えず、これは……。

「……すいません。あの、俺の部屋ってまだ決まって居ないんじゃ……」

「そうなんですけど、事情が事情なので、一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……あの、遠山くんはそこら辺のところ、政府から聞いてますか？」

……どうやら政府のやつらは俺らのことを早く檻に閉じ込めたいらしいな。

「そう言うわけで、政府はとにかく寮に入れるのを最優先にしたいらしいです」

そう言うことか。

まぁ、そんなことは置いといて。

「あ、あのっ、山田先生。そのっあ、当たってるんですが」

――俺の腕にくっついている爆弾を放してくれ。

じわっ。と体の芯に血が集まるような

そんな感覚。

ぐぅ、ヤバい……！なりかけてやがる……！

あのモードに！

「えっ？あっ！す、すいません！わ、わざとじゃないんです！あっ、あと部屋には時間を見て行ってくださいね！夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください」

山田先生もどうやら気付いたらしくあと一歩。と言うところで離してくれた。

た、助かった……！

「あ、きっと分からないと思うのでついてきてください。部屋まで案内します」

山田先生が誤魔化す様にそう提案する。だな、ここで下手に見栄はって恥をかくよりはまだましだな。

よし、ここは素直にお願いしよう。

「はい。じゃあお願いします」

そういうと、歩き始めた山田先生の後を着いていった。

廊下をみるとあいつらの姿はない。きっと部屋に行ったんだろう。
はぁ、男がいてくれて良かった。
これで俺の苦悩も解放されるぜ。
「あ、ここですね。ではどうぞ」
そう言って道を譲る山田先生。
おぉ、ここか、中々広そうだな。
横が――寮長部屋？
あれ？なぜ周りに生徒用の部屋が無いのだろう。
――まあいいか。それだけ俺に被害が無いと言うことだ。
そう、奴等は常に爆弾をもって歩いているようなもんだからな。
はぁ、と、軽く息を吐き扉のノブを捻る。
カチャリ、と軽い音がなり、ドアが開く。
お、織斑はもう居るのか。
「それにしても遠山くん凄いですね～」
「え？何の話ですか？」

そんな軽い言葉を交わしながら扉を徐々に開ける。

「え？だって遠山くん———女の子四人と同じ部屋で暮らすなんて勇気必要だなって思って」

ガシャン！ガチガチ！（開きかかってた扉を一気に閉める音）

「……どういう事ですか？山田先生」

俺は痛む頭を押さえながらそう山田先生に聞く。

「えっ！？えっ！だって峰さんが……」

理子ぉぉぉぉ！！

「……いえ、分かりました。大丈夫です。はい」

俺はその言葉を山田先生に言いながらも自分にも言い聞かせる。

そうだ。大丈夫なんだっ……！大丈夫なんだっ！

フゥゥゥゥ……！

ながーーく息を吐き、閉めた扉を、再度開く。

「あっ、キーくんだぁ！お帰りっ！」

……。

「取り合えず理子。俺は今とてつもなくお前の頭にアイアンクロー

をかましてやりたい気分なんだがどう思う？」

すると理子は急に顔が真っ赤になり、いや、真っ赤にして。

「えっ……だっ駄目だよキーくん。そっ、そんなプレイ……。…でも、キーくんが望むなら……」

まずは黙れ理子。そういうこと言うと……。

「きっ、キンちゃん！ぷっプレイって何！？どんなことをするの！！」

「バカキンジ！あ、あんた私の奴隷の癖に他の奴にそういうことするなんてっ！！こっ！このエロキンジ！風穴レンコンにするわよっ！」

「キンジさん。別に趣味については何も言いませんが人のいる前ではそう言うことは控えてください」

「いや……おい、理子。お前のせいで取り返しのつかなさそうな所まできてんぞ。ほら」

「いたいっ！悔しいっ！……でも感じちゃう……！」

「キンジィィィィ！！」

「なんっっで！！いつもこうなるんだぁぁぁ！！」

この日、俺の絶叫がＩＳ学園のなかを木霊したらしい。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

といった感じだ。

なぜか俺は織斑とではなくアリア、理子、白雪、レキというういつもながらのメンバーと同じ部屋になってしまった訳である。

気になったので、あの後、

『何でお前らと同じ部屋にしたんだ？』

と、聞くと、

『え？当たり前でしょ？そんな美味しぃ『世界初の男性ＩＳ操縦者』を一緒にしておいたら更に危険でしょ？だからせめてキーくんだけでもなるべく安全な護衛と一緒に住ませた方が良いに決まってる。ってこと♪』

はぁ。こいつもこいつで色々考えてんだな。

で、

『本音は？』

『——そっちの方がこれから面白そうだか……ってキーくんいたい痛いっ！あっ頭がっ！そこらめぇぇぇ！！』

回想終了。

「ねぇ所でキンジ。あんた今日アレよね」

アレ……とは、きっと今日のオルコット戦の事だろう。

「あぁ……まぁ、な」

俺は兄さんから貰ったバタフライナイフを制服のなかに仕舞う。

『キンジモデル』の俺の愛銃、ベレをホルスターに仕舞い、準備はOK。

後は……。

コンコン。

部屋に響く木を叩く音。ノックだ。

「織斑だけど、入って良いか？」

ん、ここはあいつらも居るし、廊下の方が良いか。

「待ってくれ、今廊下に出る」

そう言って廊下に出ると、織斑と、……篠ノ之が居た。

「ほら、今日代表決定戦だろ？だから少し話しとか聞きたくてな」

「話って…なんのだ？」

「いや、だから作戦とかの」

「……あ」

流れる重い沈黙。

「まさか……キンジ。考えて無かったのか？」

「ああ。すっかり忘れてたな。『そんな事』」

「そんな事ってお前……。かなり大切なことだと…」

いや、いっちゃ悪いかも知れないが……。

大したことないだろ。

それが俺の本音。

武偵足るもの油断はするな。とか言うが。

怪物と戦ったり、有名な偉人と戦ったり超能力者と戦ったりすると、

な？分かるだろ？

あまり負けそうな気がしないんだよ

「てか……あれだよな。この話の前に肝心なこと忘れてたな」

「……あぁ、だな」

そう。俺達は肝心なことを忘れていた。

実はまだ俺には、
ＩＳが、インフィニット・ストラトスが届いていないのだ。
今日が当日だってのに、一体何やってんだろう？
ＩＳ無いと戦えないだろ、どうすんだ？今日。
「まぁその時はそのときだな。んで、一夏についてはわかるんたが……篠ノ之さんが何のようで？」
「さんづけはしなくていいぞ、遠山。なに、私は一応お前の応援もしているのでな、是非頑張ってほしいと思っただけで……べっ別に一夏といたいからとかそんな理由じゃないんだからなっ！」
あー。そう言うことか。うん。わかった。
「あぁ、ありがとう篠ノ之さ……篠ノ之。それじゃあ、俺は腹へったし飯食いに行くわ」
「え？じゃあ一緒に食おうぜ。な、いいだろ？箒」
するとやはり篠ノ之は少しだけ困ったような顔をして。
「……ああ、別に構わない」
「いや良いや。俺はあいつらと食うから」
と、言って後ろの扉を指差す。

「ほら、後から俺達も行くから、先いってこい」

「……ん。分かった。んじゃまた今度食おうな」

ああ。と、だけ挨拶すると、織斑は背を向けて篠ノ之と歩いていった。

んじゃ俺も、

「おい、アリア飯食いに行くぞ」

「ちょっ。待ちなさいよキンジ！奴隷の癖に命令するなぁ！」

「えー？待ってよキーくん？私達もいくよ！ね？レキュにユキちゃん！」

ああぁぁ…不安要素が増えていく……！

……いや、まぁ仕方ない。俺はそれの処理係なのだ。

「んじゃ、飯食いに行くぞ」

カツカツと、靴の音が増えていく。

……二…三……四人って事は全員きたのか。

はぁ、朝から大変そうなことがおきそうだ。

……まぁ飯食ったあともう戦わなきゃならないんだけどな。

どうしようか？相手の戦略、戦い方、間合い、まだ何一つ把握していない。

いや、それが分からなくても普段なら楽に勝てただろう。

しかし、

今回の俺は、ヒスって戦わない。

これは相手にとって大きなアドバンテージになる。

何せ、あれだ。何時ものように、『仲間』が居るわけではない。

いつもは理子やアリア、そして白雪やレキのバックアップがあったからこそ、勝利を掴んでいたが、なぁ……。今回一人だしなぁ。

だが、まぁ……どうにかなるだろ。今までがそうだったように。

俺はそんな安直な考えを抱きながら、バスカービルのメンバーと共に食堂にむかっていった。

どうしてこうなった。（後書き）

何書きたいのかわからなくなってきました。

なんか友達とかは紙に書いてから書いたりしてるらしいのですが……。

私は基本面倒くさがりなのでそんなことしません（ー｜ー）

なんか良い方法無いかなぁ……。

そしてクラス代表決定戦（前書き）

今回ぐたぐたです！

そしてクラス代表決定戦

そして遂に、来た。

クラス代表決定戦が。

なのにな。何でだろうな……。

何で……。

「俺のＩＳが届かないんだ……？」

朝も言ったが、俺のＩＳが、まだ届いていない。

クラス代表決定戦の直前になっても、だ。

「どーすんのよ。キンジ」

隣のアリアがそう言う。

「どーするって……言われてもな」

どうしようもないだろ。

「まぁでも、来なかったら来なかったで――」

そこまで言ってアリアは銃を取りだし、

「こっちでやればいいわ」

言いワケあるか、と俺が突っ込む前に

「言い訳あるか、馬鹿者」

スパァン！

いつの間にか近くに居た織斑先生の出席簿が火を噴いた。

「お、織斑しぇんせい……」

衝撃で舌を噛んだのか知らないがやけに舌っ足らずなアリアの声。

「遠山、早くしろ。届いた」

届いたのか……って、届いた？

「届いたってまさか……！」

「ソレ以外に何がある。早く行け」

「――ＩＳが、待ってる」

少しだけ緩んだ口元をつぐんで、歩き出す。

俺のＩＳの元へ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「はっ、早くしてください！遠山君！」

山田先生の完全にテンパった声。

「落ち着いて下さい、山田先生」

「あっ。はいっ。ですよね。深呼吸深呼吸！すーすーすーすー……」

「取り合えず息吐いて下さい！」

真っ赤を通り越して土色になってきた山田先生を危ぶみ、指摘する。

「けほっ！けほっ！……すいません。はい。大丈夫です！あ、そしてこれが――」

むせた後、山田先生は後ろを向いて何か言おうとしたので、山田先生の目を追った。

「これが遠山君の専用機、『桜華』です」

それは、藍色だった。

とても透き通るような藍色。純粋な藍。

ソレは、俺を受け入れてくれるように、待っていてくれたかのように見えた。

「じっ、時間が無いのでフォーマットとフィッティングは実践でして下さい！」

その声を後に俺は吸い込まれるように、近付き、触れる。

「あれ……？」

違う。

あのときとは、違う。

あのときのような、電撃が走ったような感じではなく、もっと優しい受け入れるようなそんな感覚。

「背中を預ける様な……そうです。後はシステムが最適化してくれるので」

山田先生の言葉通り、装甲を開いているＩＳ――桜華に身を預ける。

すると開いていた装甲が閉じ、俺の体に合わせられる。

すると桜華からカシュッ…カシュッ…。という空気が抜ける音が響く。

そして、ＩＳが自分に成った。

まるで自分のからだの様な一体感。

解像度を一気に上げたかのような感覚が視界を中心に広がって、全身に行き渡る。

各種センサーが告げてくる値は、どれも普段から見慣れているかの

ような理解できる。

「ん？」

――戦闘待機状態のＩＳを感知。操縦者セシリア・オルコット。ＩＳネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊武器あり――。

「ＩＳのハイパーセンサーは問題なく動いてますね！遠山君、気分は悪くないですか？」

「はい。問題ないです」

手を動かすとＩＳの方も動く。

カシャカシャ鳴る音が『オロチ』に似てんな。

そして後ろにはバスカービルのメンバー。

分かる。そちらを見なくても、俺には３６０度全方位が見えている。

「アリア」

その声に少しだけビクッ、として

「な、何よ」

「行ってくる。ももまん、一つ寄越せよ」

ソレを聞くとアリアは、

「……いいわよ。ただし、勝ったらね」

んじゃ、勝たなきゃな。

その言葉に首肯で答え、俺はピット・ゲームに進む。かすかに体を傾けるだけで、桜華は浮いた。

ちきちきちきちきちきちきちき。

クリアーな意識の裏側では桜華が膨大な量の情報を処理している。

そう、今コレは俺の体に合わせて最適化処理を行う、その前段階の初期化を行っているのだ。

今こうしている一秒の間にも、桜華は形を変えていっている。

中身と外見の両方を一斉に書き換えているのだ。扱ってるいる数値は見たことのない数値を示している。

まあま、今はそんなことを考えている暇はない。

ゲートが開くまで、もう少ししかないのだから。

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがフフンと鼻を鳴らす。

また腰に手を当てたポーズが様になっている。

……。鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士の様な

気高さを感じさせる。

さて、ここからどうするか。

「最後のチャンスをあげますわ」

セシリアが腰にを当てたまま、そう俺に告げる。

「……どうせ、泣いて謝るなら～とか、だろ？」

「んなっ！？……前言撤回させていただきますわ。貴方は、泣いて謝っても許しませんわ！」

――警告！敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認。初弾エネルギー装填。

キュインッ！

耳をつんざくような音と共に走る閃光。

俺はソレを見て、避ける。

と、思えたが

ガウンッ！

「おわっ！」

――バリアー貫通、ダメージ４６。シールドエネルギー残量、５２

1。機体ダメージ、レベル低。
避けられなかった。その理由
（……俺が、コイツに追い付けていない）
大雑把にいうとＩＳバトルはシールドエネルギーをゼロにしてしまえば勝ち。
だが、今のようにバリアー貫通をされてしまうと実体がダメージを受ける。
そしてそのダメージはその後の戦闘に大なり小なり影響を与えることになる。
「さあ、踊りなさいっ。わたくし、セシリア・オルコットの奏でる円舞曲で！」
「俺はんなもん踊れねーよ！」
良いながら何とか、かわす、かわすかわす。
「てか装備だよ装備！」
そう言うとすぐさまに現在展開可能な装備一覧が現れる。――一覧？
そこにあったのは、
「……コレ……か。まぁ、出来ない事はないな」
俺は呼吸を整える。

「なによそ見して居ますの！？」

そう言ってオルコットは、また撃ってきた。

そして、俺に当たる直前に――。

パシュ。

消えた。

「え？」

オルコットが、何があったのか分からない。といった感じで声をあげる。

当たり前だ。

コレは俺が必死に練習した『不可視の銃弾』。

ヒステリアモードじゃなくても使えるようにならないと駄目だと思い、ようやく手に入れた力だ。

アリア達には見えてるだろうが、あまり経験の無い者には見えない。はず。

「あっ。貴方いったい何を……！」

「いや、言ってもきっと分からないと思うぞ？」

俺が軽い調子でそう言う。

「なっ！？貴方！この期に及んでまだ私を侮辱するつもりですの！？」

おぉっと。相変わらず沸点が低い。

それからセシリアがブルー・ティアーズの特殊レーザー４つの猛攻撃が始まった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「――にっ……。二十七分。持った方ですわねっ……！誉めて差し上げますわ…！」

途切れ途切れの言葉使いでまだ強がりをいうオルコット。

あぁ。確かに凄いよ。流石は代表候補生。ただその名をもっている訳ではないらしい。

判断能力。攻撃までのモーション。それらは素人のソレではなかった。

伊達に威張っているわけでは、ない。

ただ、

俺の近くにもとってても偉そうで偉い馬鹿がいるけど、

「あいつはもっと凄いぜ？」
そう言って俺は『不可視の銃弾』を再度放つ。
今度は相手の機体に直撃し、シールド貫通。
しばらくはまともに動けない筈。
「じゃ、終わらせるぞ」
俺はそう言い武器を構える。
しかしその時、オルコットが笑った。
「それはっ」
「こっちの台詞ですわっ！」
その言葉の後に俺は気付いた。
あのＢＴ兵器は、
４つだけじゃないっ！
しかし時すでに遅し。
ＢＴ兵器から放たれるビームで、俺は爆炎に包まれた。

そしてクラス代表決定戦（後書き）

次でセシリア戦は終わらせたいですね！

ではまた次回！

そうして……（前書き）

どうも……。チキン執事です。

昨日は熱出しちゃって更新できませんでした。

まだ熱自体は引いてないのですが、学校休んで暇なので。

今回。いつもより少ないです。

では、どうぞ！

そうして……

アリアｓｉｄｅ

キンジとあの代表候補生のクラス代表決定戦。

の一回戦。

「それはっ」

先程まで完全に不利な状況まで追い込まれていた筈のセシリアが、笑顔を見せた。

それは貴族の様な上品な笑みではなく、野蛮な戦士が見せるソレだった。

「こっちの台詞ですわっ！」

その言葉を最後にキンジは爆炎に包まれた。

「あんのバカキンジ……！」

あそこで油断するからそうなる。

そう、多分キンジは『負ける筈は無い』

そう考えて居ただろう。

その見立ては間違いではない。

私や理子、それに白雪も、同じことを考えているでしょう。

――キンジがミスをしない限り。

そう、ミス。

ミスとはいうのは大きな物から小さな物まであるだろうが、私達、『武偵』にはその大きさについては問題はない。

ミス。つまりは隙が生まれるわけである。

『隙』とは、相手の判断が遅れたり、鈍る。

その判断が遅れた時に、間合いにはいられたら？

多分、流石のキンジでも、怪我を負う。

……『あのキンジ』なら話は別だけど。

私も武偵成り立ての頃、そんな考えは確かにあった。

私は過去に一度も犯人を逃したことがない。いや、一度だけ合ったか？いいや、最近では多く逃している気がする。

お祖父様。理子。……そして、キンジ。

まぁ、それは置いといて、前までは逃した事がなかった。

しかし、全部が全部楽に。と言うわけにはいかなかった。

中にはどこから手に入れたのか分からないがまだ軽く未完成なステルス迷彩の服を着ていた犯人だって存在した。

そう、油断は大敵。

気弱そうな奴でもやるときは殺るし、小さな虫でも強力な毒を持っていることだってある。

今回キンジは、見事にその穴にはまってしまったわけ。

あーあ。

でも、まぁ。

「重要なのはこれからね」

ボソッ。と、言ったこの一言は、周りの女子の喧騒に埋もれ、誰にも届くことはなかった。

キンジｓｉｄｅ

終わる筈だった試合。

笑ったセシリア。

その瞬間走った閃光。

そして、爆炎が俺を包み込んだ。

俺を取り巻く、土煙が、晴れていく。

身体に感じる浮遊感。これは……ＩＳの中。

あれ……？俺今負けなかったっけ？

少しだけ、混乱する。

すると、ブォン！という音がなり、俺を取り巻く土煙が逃げるように消えていく、

そしてまず視界に入ったのは、桜華。

……なのか？

何故疑問系？と思うかもしれないが、アレだ。

見た目がなんか変わっている。ちょっとびっくりだ。

いや、桜華、というのは分かるんだが…なぁ。

なんていうんだろう……。

なんかポニーテールをいつもしている女の子が急に髪型を大胆に変えたりしたら、分かるんだけど…聞いちゃう。見たいな感じの奴だ。

まず何で形が変わったんだ……？

何て考えていると、

――フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

フォーマットとフィッティング、つまりそれは

「一次移行……か」

それを改めて確認した瞬間、また、新しいデータが直接脳内に送られてきた。

――いや、正確には整理されていっている。

そしてそれは、劇的に現れた。

「うおっ……これは……」

新しく形成されたＩＳ装甲は、先程より強靭に強力になったように感じられる。

「ま、まさか……一次移行！？あ、あなた！今まで初期設定で戦っていたと言うの！？」

そうか、これでこの機体は

『俺のもの』になったわけか。

そして、変わったものといえばもうひとつある。
武器だ。
俺の手には先程の銃は握られていなかった。
そう、先程の銃は。
代わりに握られていたのは、
なんだ？……これ？
いや、銃というのは理解できるが……。
見たことがないような形だ。
するとまた、情報が脳内に流れてきた。
――中距離武器『白桜』
あ、分かる。解る。判る。この情報が流れてきた瞬間、まるで桜華を始めて触ったときのような感覚に襲われた。
そして、
俺は構えた。
目の前の敵に向かって。
悪いな、オルコット。

俺、まだももまん食ってないからな。

負けるわけにはいかないんだ。

放つ。

キュイン。

甲高い音を奏でながら一直線に相手に向かっていく銃弾。

キュインキュイン。

また、もう二発。

そして、

キュイン…キュイン…キュインッ！

放つ、放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ。

とにかく放つ。

流石にこれはオルコットにも避けられない。

案の定、俺の銃弾はオルコットのシールドエネルギーをだんだんと減らしていっている。

そして、その無数の銃弾は――まるで。

アリアｓｉｄｅ

勝てる。私は確信した。

この勝てるというのは、別に確率的にじゃない。

信頼。経験。何より、キンジだから。

あのバカはバカな所でミスをして、いつも最後は勝っちゃうような奴。

そして、今。あのバカはあの代表候補生を今、圧倒している。

あいつの銃から出ている輝く白に薄いピンクの混じった無数の銃弾は、まるで。

「桜……みたい」

誰かが漏らしたその言葉。

フンッ。まぁ、

「流石は私のパートナーなだけはあるじゃない♪」

キンジｓｉｄｅ

「なっ。何故！何故扱って間もない男なんかに！ここまでっ……！」

「簡単だ」

とても親切かつ丁寧な俺は、特別に教えてやるよ。

「前の俺なら、お前に勝てるかわからなかったよ。『アイツ』が落ちてこなかったらな」

「あいつ……？」

セシリアがダメージ等で眉を寄せながらそう呟いた。

「確かにお前は凄い。多分凄い密度の濃い生活をしてきたんだろう。きっと小説がかけそうなぐらいな」

でもな、と俺は続く。

「でも、俺はこの半年、もっと非現実的で密度も濃くてあり得ない高校生活を送ってきたんだよ！」

更にもっと、放つスピードを上げた。

放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ
放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ

まるで、散る桜のように、銃弾は舞う。

歌うような悲鳴を奏でながら。

「この桜吹雪っ…！散らせるものなら…散らせてみやがれっ！！」

そして。

ブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者――遠山キンジ』

俺とセシリアの戦いは、俺の勝利で幕を閉じた。

そうして……（後書き）

かなり今回意味不明な描写が多かったと思います。

本当、戦闘描写が苦手なんですよね。

それにしても『桜華』の設定をどうしたものか。

なんか、皆さんの作品を参考に使用としても皆……。

えー、そこまで書いちゃうの……？

ってなるぐらい詳しくてビックリしてます。

はぁ、本当にどうしたもんか。

現れたのは（前書き）

すいません！授業中にケータイで執筆してたところ見つかり奪われていた為、執筆出来ませんでした！

と、言うことでいつもよりかなりおおめにしました！

２つ分ぐらいあるのでお許しをっ！

と、いうわけでどうぞ！

現れたのは

翌日、朝のＳＨＲ。

「では、一年一組代表は遠山キンジ君に決定です！」

山田先生は嬉々として話している。

そしてクラスの女子やアリアやあの無表情のレキでさえ顔を綻ばせていた。

暗いのは、俺だけだった。

俺、一人だけだった。

「せ、先生。今から代表を変えることなどは……？」

「無理に決まっているだろう。馬鹿者」

ですよね。わかってます。

てか急に話に入ってこないでほしい。

本当にビックリするから。

「ならそんな当たり前の事を聞くな」

……いや、普通に心読まんでください。

はぁ、何で俺織斑と戦ったとき勝っちゃったんだろう。

用は、手加減を忘れた。

今まで、死闘を繰り広げすぎたせいで、戦いに対して余裕というか手加減が完全になくなっていることに気づいた。

まぁ、手加減を忘れた俺が負けるわけもなく、織斑に勝ってしまったと。

やばい。マジでどうしよう。

?皆の期待に応える

?二人ともに勝っちゃったんだし全力で挑む。

……なんだこの『ｙｅｓ』と『はい』しかない選択肢。

「遠山。言っておくがお前に逃げ道はないぞ」

止めを指すような織斑先生の言葉。

この人もう武偵になれば?蘭豹までくらいなら倒せそうだ。

「……クラス代表は遠山キンジ。異存はないな」

はーい。

と、俺を除く皆がにこやかな笑顔で返事をした。

あ、今の織斑の笑顔腹立った。制裁を加えておこう。

いや、待て。そう言えばどこぞのイギリス代表様は男である俺が代表になることに関してとても嫌悪感を抱いていたはず。

罵詈雑言を言われるのをなんとか我慢すれば俺にも活路がみえてくるやもしれん……！

「あ、あの～すいません？オルコットさん？えーっと……俺が代表になるのは大変迷惑では……？」

「何をいってるんですの！？」

バンッ！！といつも通りに机を叩くオルコット。

うん。よし、心の壁展開。これで俺も罵詈雑言に耐えられる。

「私に勝った“キンジさん”が代表をやるのは当たり前の事ですわ！」

あれ？なんだこの……知らない人。

おかしいぞ。あの純度１００％の女尊男卑の縦ロールはいずこへ？

「この代表候補生である私に勝ったんですの！そのエリートを越えたキンジさんはとても（ｒｙ」

うわっ。なんだかわからんが次は俺の話をしているらしい。

できればやめてくれ。アリアと白雪の視線で今俺は死ねそうだ。

てかいつの間にこいつは変わったんだ？

まぁ……これからは少なくとも仲良く接することが出来るかもな。

「所で……オルコットさん？　あの、じゃあ貴女は俺が代表になることを承諾すると……？」

「当たり前ではありませんか！　それとキンジさん！　わたくしの事はオルコットではなくセシリアとお呼びください！」

うっわ。今の一言でアリアがガバメントを、白雪が長刀を抜き始めた。

ついでに理子は……寝てやがる。

やめてくれ。ここはあの頭のおかしい高校でもねぇのに何でそんな物を抜くんだろう？

あぁ、あいつらも十分頭がおかしいからか。納得だよ。

そうして結局、アリアが俺に風穴攻撃を、
そしてそれを見た白雪がターゲットをセシリアからアリアに。
最後には、織斑先生の出席簿が火を吹き、一気に鎮圧された。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。遠山、織斑、オルコット。ためしに飛んで見せろ」

四月も下旬、遅咲きの桜の花びらがちょうど全部なくなった頃、俺は織斑先生の授業を熱心に聞いていた。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開に一秒もかからないぞ」

そんな人たちと比べないで下さい。

なんて言葉は意味はない。

今更だがここは武偵高校並に……いや、もしかしたらそれ以上に頭のおかしい高校だ。

だってさ…いや、これ以上言うまい。

これで俺の胃に穴が開いたらどうしてくれるんだろう？

よし、そうなったら訴えてやる。

「そんなこと考えて無いで早く展開しろ馬鹿者」

パァン！

え？何？なんか痛みを越えてスースーするんですが。これ。

てか始めて叩かれた。

織斑はこんな痛みを一日四回以上味わってるのか。

なんか織斑の苦労がわかった気がした。

なんて考えていたらまた出席簿アタックをされてしまうから俺はゆ

びにある指輪を握り締め、意識を集中した。
俺の指に着いている指輪とは『桜華』。
どうやら一度フィッティングしたらその操縦者のアクセサリーになって、待機状態になるらしい。
なんとも楽だな。
っといかん。集中……集中！
指輪を嵌めた方の手を、額のところまで持っていく。
これが俺のＩＳ展開が一番しやすいポーズ。
カッコつけとかそう言うのじゃなくてなんかこれが一番集中しやすいんだ。
（……来い、桜華）
そう呟く。刹那、指輪がはまっていた左手が光の粒子に包まれその後から全身がその粒子に包まれていく。
ふわりと身体が軽くなり、一度目を閉じて開く頃には、俺の身体は装甲に包まれていた。
「よし、飛べ」
その言葉を後に、俺は空に飛び上がった。
織斑曰く、『空を飛ぶイメージなんて分からん』
らしいが、俺はアリアと白雪のせいで何度もベランダからのダイブ

をしてきたお陰でなんだか感覚を掴みやすかった。
今だけは感謝しといてやるよ。今だけはな。
ＩＳの機能で飛躍的に視力が上がった俺は米粒レベルになったアリアの表情を見る。
なんとも満足げな表情だな。
言い表すと「よくやったわねキンジ。そういうキンジはいいキンジ」って感じだ。
「あ、あのキンジさん。もしよかったらこれから一緒にＩＳの練習など一緒にどうですか？」
気が付くといつの間にかセシリアがとなりにいてそんな提案を持ち掛けられた。
ふむ……。練習か、確かに。この前は偶然勝てたが次は勝てるとは限らない。
よし、ここは受けるかな。
「あぁ。じゃあセシリア。放課後とかでいいか？」
それをいうとセシリアの顔がパァァァ！と明るくなり、
「はい！喜んで！」
と、言ってくれた。はぁ、良いもんだな。普通の女子って。

……普通かどうかはわからんが。

「織斑、遠山、オルコット、急降下と完全停止をやってみろ。目標は地表から十センチだ」

と、下からは織斑先生の声が届いた。

十センチって……。出来んのか？

取り合えず俺はセシリアの後に続き、桜華で急降下した。

ふぅ……何とか行けそうだ「うわぁぁぁ！キンジぃ！どけてくれぇぇぇぇ！」……え？

ふと、上を見るとそこには、いや、眼前には誰かの頭。

ガゴンッ！

そんな鈍い音の後、

ギュンッ――――――ズドォォンッ！！！

織斑と仲良く墜落した。

「……う、う？」

回りの砂煙が晴れていく。
俺のからだが動きにくい、つまり、俺の身体の上に織斑の身体が乗っかっているらしい。
ぐぅぅぅ……こいつのせいでこの土煙が晴れた後笑われるんだろうな。
しかし、土煙が晴れた後、待っていた反応は別のものだった。
「キャァァァァァ！」
え？なんで皆そんな黄色い声をあげるんだ？
と、聞こうと思って俺の上にいる織斑を起こそうとした――――ら、皆が黄色い声をあげている理由が分かった。
「……おい織斑。取り合えず俺の上から降りてくれ」
そう。今織斑は俺の上に馬乗りして居るのだ。
「え？あぁ悪い、重かったよな」
意味を理解していないらしい織斑がそう判断して俺の上から降りる。
違うんだ……違うんだよ織斑！
見てくれこの回りからの腐った視線を。

もうだめだ、この後から俺には、『女ったらし』『昼行灯』そして新たに『男色家』という不名誉なレッテルが貼られることだろう。

俺は溜め息を吐きながら、ＩＳを解除する。

ついでに織斑は先生に怒られている。

ちょっとスッキリした、と言うのは黙っておこう。

「織斑、お前はその穴を後で埋めておけよ。よし、じゃあ次は武装を展開しろ、それぐらいは出来るだろう？」

「は、はぁ……」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。では始めろ」

そう言われた織斑は、正面に人が居ないことを確認してから、織斑は腕を突きだし右腕を左手で握った。

すると、織斑の手に光が灯り、それが形を成していく。

そして光が収まる頃には、白い剣、名は《雪片弐型》が握られていた。

（織斑は完全に出せるのか……）

思ったが織斑はきっと潜在能力的なものがあるんだろう。

予想以上に飲み込みが良い。

いや、飲み込みがいいというか、ここぞと言うときに凄いことをやってのける。

実は俺との戦いの時も、最後の最後にイグニッションブーストを使われて、ダメージを負ったり。

流石は世界王者の弟、なだけはある。

「遅い、０，５秒で出せるようになれ。じゃあ次は遠山、お前がやれ」

俺はホルスターから抜き取るような動作で腕を動かす。

そして俺の手には、銃が握られていた。

「……０．３…ま、まぁ中々だな」

お、おう。ちょっと自分でもビックリした。

なんか『不可視の銃弾』を練習してから、出すのが早くなったな。

「ンンッ！……じゃあ次はオルコット。貴様がやれ」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。そして織斑のよう

に光の奔流が放出されるようではなく、一瞬爆発的に光っただけで武装は展開されていた。

そして銃器はマガジンに接続されていてセシリアが視線を送るとセーフティが外れた。

一秒と経たずに展開、射撃可能まで完了していた。

「流石は代表候補生だな。――ただし、そのポーズは止めろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面で展開出来るようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ、いいな」

「――、……はい」

かなり不承不承といった感じの応答。まぁ、仕方ない。相手は織斑先生。反論の余地はあっても無いに等しい。

「セシリア、近接武器を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

きっと頭の中で文句を言っていたんだろう。

いきなり振られて会話にビックリして反応が鈍っている。

「……くっ」

「まだか」

「す、すぐです……。――あぁもう《インターセプター》！」

武器の名前を半ばヤケクソ気味に叫ぶ。

これは教科書の冒頭に載っている言わば、『初心者用の』展開の仕方。

「……何秒かかっている。お前は相手に待って貰うのか？」

「じ、実践では近接の間合いには入らせません！ですから、問題はありません！」

「ほう。遠山との戦いでは間合いに入られなくても負けていた気がするが」

「あ、あれは、その……」

ゴニョゴニョとまごついて、セシリアの言葉の歯切れが悪い。

織斑とそのようすを何の気無しにそのようすを見ていたら、キッと睨まれた。

そして送られて来たのはセシリアからの個人間秘匿通信。

『貴方のせいですわよ！』

何でだよ

『あ、あなたがわたくしに勝つから……』

何という傍若無人な台詞なんだ……！

『と、とにかく責任をとっていただきますわよ！』

……何のだよ。

何て言う台詞は心のなかで留めておく。
言った所でどうせ面倒臭い事にしかならない。
俺はそれをアリアたちとの暮らしで学んだんだ。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

織斑が「忘れてなかったか……」と凹む。

俺はそんな織斑を見て、

「織斑……」

「キンジ……まさかお前……！」

あぁ、と俺はかぶりを振って答えた。

「教室の窓から応援でもしてやるよ」

「この鬼ィ！」

おう、何とでもいえ。俺は面倒臭い事は嫌いなんだ。

てか元々自業自得だよな……？

俺は織斑を見捨て、普通に教室に戻っていった。

◆◆◆

ぶつくさ言いながらも、足は動かす。

――ったく。出迎えはないって聞いたけどさぁ、幾らなんでも不親切過ぎない？仮にも私、『中国の代表候補生』なのよ？政府の奴等だって異国に十五の女放り込むとか何か思うところないわけ？

少女は、日本人と似ているがよく見ると違う。その鋭角的でありながらもどこか艶やかさは中国人のそれだった。

とはいえ、この少女にとっては日本は第二の故郷であり、思い出……いや、思い人のいる場所でもある。

（誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内人とか）

それがいたらきっと少女はここまで苦労しなかっただろう。

（あーもー、面倒臭いなー。空とんで探そうかな……）

一瞬名案だと思った彼女だが、やめた。

あの『アナタの街の電話帳』三冊分の厚さのあの学園内重要規約書を思い出したのだ。

まだ転入の手続きが終わってない中、ＩＳを起動させようものなら、事である。

最悪、外交問題にも発展しかねない。

それだけは頼むから勘弁してくれ、と言ってペコペコと頭を下げる

大人の姿を思い出すと、少し気が晴れた。

（ふっふーん。まぁね。私重要人物だもんねー。自重しないとねー）

正直言って、自分の倍以上も歳のある大人がへこへこ頭を下げる様は、ちょっと自分でも気分がいい。

昔から『年食ってるだけで偉そうにしてるやつ』が大嫌いな彼女にとって、今の世の中は非常に居心地が良かった。

男の腕力は児戯、女のＩＳこそ正義。それもまた気分がいい。

少女はかつて、『男というだけで偉そうにしている子供』が大嫌いな子供だった。

――でも、アイツは違ったなぁ。

とある男子のことを思い出す。

と、いうか今はその男子のことで頭がいっぱいだ。

理由は簡単。

それこそが彼女がここにいる理由だからだ。

「だから……でだな……」

そんなことを半ばニヤケ顔で考えていると女の声が聴こえてきた。

良かった。そう思った瞬間だった。

「だから、そのイメージがよく分からないんだよ」

ふいを突かれて、少女はびくんと震えてその足が止まる。

男の声――それも、知っている声にすごいよく似ている。いや、多分７０％の確率でそうだろう。

予期しなかった再会に、少女の鼓動が急ピッチでペースを上げる。

――あたしってわかるかな？わかるよね。一年ちょっと会わなかっただけだし！――でももし……いや！それはそれであたしが綺麗になったからよね！うん！

超ポジティブ思考にスイッチを入れて、少女は再び歩みを再開する。

「いちっ――」

あぁぁぁ！どうしよう声裏返っちゃった！意識してるって思われる！！恥ずかしいなぁ！

だが、そんな乙女な考えは一瞬に無くなった。

「一夏、いつになったらイメージを掴めるんだ。先週からずっと同じところで詰まっているぞ」

「あのなぁ、お前の説明が独特過ぎんだよ。なんだよ『くいって感じ』って」

「……くいって感じだ」

「だからそれが分からな――っておい！待てよ箒！」

すたすたと足を速める女子に、男子が追いかけていく。

――誰？あの女の子。何であんな親しそうなの？っていうかなんで名前で読んでんの？

さっきまでの胸の高まりは嘘のように消え、そこにあったのはとても冷えきった黒い感情だった。

それからすぐ、総合事務受付は見つかった。
アリーナの後ろにあるのが本校舎だったからだ。明かりがついていたから、そこだと分かった。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園へようこそ、凰鈴音さん」

愛想のいい事務員の言葉もどこか遠くにあって意識に届かない。少女――鈴音は、見るからに不機嫌ですとばかりに口を尖らせていた。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「あぁ、噂の子？一組よ。お隣ね。そうそう、そう言えばあのクラスは二人も男の子が居たわよね。たしかクラス代表になったのはそっちの子だったはずよ。スゴかったわね～あの男の子と男の子の戦い」

噂好きは女性の性なんだな、と改めて知りながら、少女は新たな感情を抱いていた。

あたしの思い人を――一夏を倒したそいつを見てみたい。いや、それだけじゃない。

――闘いたい。

そんな好戦的な気持ちを代弁するかのごとく、可愛いげのある犬歯が口から覗いた。

しかし、そうそう戦うことなんて出来ないだろう。

だからとる方法はただひとつ。

「二組のクラス代表って、もう決まってますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと……聞いてどうするの？」

鈴音の対応に少しおかしなところを感じたのか、事務員は少し戸惑ったように聞き返す。

「お願いしようかと思って。代表、あたしに変わってって――――」

にっこりとした笑顔には、もう先程の感情は宿って居なかった。

現れたのは（後書き）

うわー…こっからどうしましょ。

まぁ頑張ってみます！

クラス代表就任パーティー（前書き）

ようやくの投稿！

今回は結構スランプ気味なので変なところも多いと思います。

クラス代表就任パーティー

「というわけでっ！遠山くんクラス代表決定おめでとう！」

パァンパァン！とクラッカーが乱射される。

ちなみに今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っていた。

各自手にはお菓子やら飲み物をもってやいのやいのとさわいでいる。

「……」

めでたくない。ちっともめでたくないぞ。何なんだこのパーティー。

そう思い壁の方に目を向けるとそこにはでかでかと『遠山キンジクラス代表就任パーティ』とかかれていた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

というか思ったんだがこの人数明らかに多くないか？少なくとも四クラス分ぐらいあるんじゃあ……。

「人気者なのね、キンジ」

「……なわけあるか」

知ってるか？今ほとんどのじょしがラフな格好してるせいで俺からしては地獄にしか見えないことを。

「はいはーい！新聞部でーす。話題の新入生。織斑一夏くんと、クラス代表に就任した遠山キンジに特別インタビューをしに来ましたー！」

オーと一同盛り上がる。オーじゃねぇんだよ。オーじゃ。

「あ、私は黛薫子。宜しくね。新聞部副部長やってます。これ、名刺ね」

「ではまず織斑くん！ここ、ＩＳ学園に入った感想はどうですか？」

「へっ！？……えっと…まぁ、はい。みんな優しいので何とかやっていけてます」

「そうですか。では次にどうしてここに来たんですか？」

「藍越学園とＩＳ学園を間違えたからです」

おい、そこをキッパリと言うな。

「……あーーー。はい、ありがとうございました。では！次にクラス代表の遠山キンジくん！ここにきた理由は何ですか？」

「えーとですね。ＩＳの護衛をバスカービル……いや、アリアと理子とレキと白雪とワトソンでやってたら間違ってＩＳに触れちゃっ

て……」

「ん？という事はアリアちゃんと白雪ちゃんと理子ちゃんとレキちゃんとは元々の知り合いだと？」

「あー……まぁ」

いうんじゃなかった。俺の予感が正しければこのあとカオスな展開がありそうな……。

「んー。じゃあ、それぞれとの出会いは？」

一番やめてほしい質問きたーーーー。

「えっと……それは「私とキンジのってたしかチャリジャックよね」……あぁ」

「チャリジャック？」

「はい。バスに乗り遅れたんでチャリで行こうと思ったらチャリに爆弾仕掛けられてることが分かって徐々にスピードを上げないと爆発するっていうやつです」

それを聞いて、みんな唖然とする。

「しかも回りにはセグウェイに取り付けられたＵＺＩに追い回され変な行動ひとつとれば……っていう奴ですね」

それを聞いて、更に唖然とする。

「えっ。えっとだ、大丈夫だったの？」

「はい。何とか」

「とか言ってぇ～。キーくんアリアに助けてもらってたクセに～」

「うっせ。仕方ないだろ」

「そんなんで死なれたらがおーだぞ！」

そういって理子は指でぴき、と角を作った。

てかやったのお前だよな？

「あ、はい。じやあ最後にクラス代表になった感想をどうぞ」

「えー……まぁ、頑張ります」

「えー？もっといい台詞頂戴よ～。俺に触れるとやけどするぜ！とか」

偉く前時代的な台詞だな。

「えーーじゃあ『この桜吹雪散らせれるものなら散らせてみやがれ』で」

「うわ、前時代的！」

なんだって、俺のご先祖様の名言だぞ。

「じゃあまぁ、適当にねつ造しておくからいいとして」
どこが良いのか全くわからない。
「ああ、セシリアちゃんもコメント頂戴」
「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですね」
とか言いつつ、髪の毛のロールはいつもより少し大きくかかってたりとても気合いが入っていないとは思えないんだが。
「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかというと――」
「あぁ、長くなりそうだから良いや。写真だけちょうだい」
「話を最後まで聞きなさい！」
「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、遠山くんに惚れたからにしておこう」
「なっ、な、ななっ……！？」
ボッと赤くなるセシリア。おっ。今の赤面速度はなかなか早い。アリアには遠く及ばないが。まぁ、アリアの場合、十中八九赤くなった後風穴攻撃が飛んでくるからまだましか。
「そんなことがあるわけないだろ。なぁ、セシリア」

「えっ！？あの、その、ぅぅぅぅぅ……」
やば、不覚にも可愛いと思ってしまった。
一瞬だけだがヒステリアの血流を感じたぞ。
というか違うなら違うっていえよ。勘違いされるぞ。
「はいはい、とりあえず二人ならんでね。写真とるから」
「えっ？」
意外そうなセシリアの声。
「注目の専用器持ちだからねー。ツーショットでいくよ～。あ、握手してね」
「そ、そうですか……。そう、ですわね」
何故かモジモジとし始めたセシリアはチラチラとこちらの様子を伺っている。
なんだこの、『チャンス到来！でも安くみられないように気を付けよ』的な雰囲気。
「あの、撮った写真は当然いただけますわよね」
「そりゃね」
「でしたら今すぐ着替えて……」
「時間かかるから駄目。はい、さっさと並ぶ」

そういって俺達の手を取り握手させられる。

「……」

「？どうした？」

「別に何でもありませんわ」

じゃあジロジロこっちを見るな。俺は見せ物じゃないぞ。

「「「「……」」」」

前々から何だがセシリアの視線よりバスカービルのじと目の方が結構気になる。

「なぁ、お前らも何なんだよ」

「べっつにー」「え？いや……その」「何でもないわよ。このバカキンジ！」「……」

こっちをジロジロ以下同文。

「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」

「……えっと、２？」

「ぶー、７４．３７５でしたー」

歯切れ悪っ。

パシャッとデジカメのシャッターが切られる。……ん？

「何で皆入ってるんだ？」

恐るべき行動力をもって、一組の全メンバーが撮影の瞬間に俺とセシリアの回りに終結していた。入ってないのは織斑と篠ノ之だけである。

「あ、あなた達ねぇ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けは無いでしょ」

「クラスの思い出ってことで」

「ねー」

クラスメイト達に丸め込まれてしまうセシリア。

「うっ……ぐぅ…！」

苦虫を噛み潰したような表情をしているセシリアを皆はニヤニヤと見ている。

何があったんだ？

なにがともあれ、この『遠山キンジクラス代表就任パーティ』は１０時過ぎまで続いた。

周りの視線やアリア達の視線によってメンタル面の消耗が激しかった俺は終わるや否やでベッドに潜り込みさっさと寝ることにした。

三人称ｓｉｄｅ

「アリア、間違いないんだね？」

奴隷２号（白雪）のいつになく真剣な声。

「うん。さっき綴先生から連絡が入った」

この話は、あのＩＳを護衛していたときの話。

実はあの後、綴先生に頼み、あの襲撃犯達がどこの組織のものか尋問してもらうことにした。

そして先刻、ようやく犯人は吐いたらしい。

それが――

「亡国企業（ファントムタスク）よ」

「ファントムタスク？」

理子がわざとらしく首をかしげる。

「ファントムタスクってのはまぁ私もよくわからないんだけど、ど

うやら」

「私の中の殻金持ってるらしいのよ」

その言葉にみんながピクリと反応した。

「皆にはもう話したわよね。私の中の緋緋色金の事を」

まぁ、白雪は私より知ってるんだけどね、と付け足す。

「それで、聞いたところファントムタスクはＩＳの『コア』を狙っているらしいわ」

コア、それはＩＳを動かす上で一番必要なもの。

しかし、それは作れない。

いや、作ってくれないのだ。

ＩＳの開発者、篠ノ之束博士が。

ＩＳのこあのなかは完全なるブラックボックスで篠ノ之博士以外誰にも作れない。

だから、『ファントムタスク』はそれを狙ってきた。

ＩＳ学園にあるＩＳを。

「しかも、今ここには『世界に二人しかいない男のＩＳ操縦者』がいる。つまり――」

「そいつら捕まえて殻金取り戻せば良いのよっ！！」

シーーーン。

そこに聞こえるのは、キンジの寝息だけ。

「えーっと……アリア？その……捕まえる上での方法は？」

流石の理子も軽く顔をひきつらせながらアリアにそう聞くと、

「作戦？なにそれ。バッとやって普通に捕まえれば良いじゃない」

それを聞いた瞬間、皆はまた黙り、一拍置いて溜め息を吐いた。

「はぁ…。アリア？そんなことで捕まえられるの？」

白雪が溜め息混じりでそう聞く。

「ん？私今まで作戦なんてあまり立てたこと無いわよ」

皆はそれを聞いて、確かにと思った。

デュランダル――つまり、ジャンヌの時、

ブラドの時は作戦は立てたものの意味のなく、結局は作戦なんてものはなかった。

「だから、お願い。今回は私を信じて、力を貸して」

アリアの真っ直ぐな視線。

皆は顔を見合わせ頷き、

「くふふっ……アリアに死なれても困るし。いいよ、でもあんたを殺すのは理子だからね」

「……私は星伽に身を置くものとしてやらなければいけないことだから。手伝うよ。アリア」

「……アリアさんは『友達』なので、手伝わせていただきます」

「……ありがと」

アリアは今更ながら真っ赤な顔をうつむかせ、そう言った。

そんなアリアを見ながら笑い合う姿は、どこからどう見ても、

『普通の女の子』だった。

クラス代表就任パーティー（後書き）

なんだこのおわりかた？

いや、考え付かなかったんですよ。

すいません。

とにかくまた次話でお会いしましょう！

セカンド幼馴染み（前書き）

おはよーございます！

最近リアルなスランプのチキンでございまーす！

……どうしよ。

今回ちょっと書き方を変えて書いたので読みにくいかもしれません。

前の方がよかった。という方は感想とかに書き込んでくださいね！

ではどうぞ！

セカンド幼馴染み

「お早うキンジ」

朝。席につくなり、寄ってきた織斑がそう声を掛けてきた。

「あぁ、お早う織斑」

こんな普通の日常風景。廻りの女子の人口密度の高さは流石に頭痛もんだがこういう普通の朝の挨拶を交わしていると、ここにきてよかったと、少しだけ感じる。

何てったって今日は朝っぱらから硝煙の匂いを嗅ぐことになったからな。

「なぁなぁ、ところで聞いたか？」

突然。織斑が話を振ってくる。

「何をだ？」

俺はなにも聞いていないため、織斑から情報を聞き出そうとそう聞くと、

「やっぱ知らなかったか。……まぁ俺もさっき知った身だからなんも言えないんだけどな。んで、その話なんだけど――キンジ達以外にも転入生が来るらしいぞ？」

「転入生が？」

確かにそれは――珍しい。
普通の高校なら結構あるのかも知れないがここはＩＳ学園。――つまり、この世界の均衡を打ち崩した兵器を扱うような所だ。
そんなに容易く転入できるような所ではない。
そこから導き出される答えと言えば、
「……代表候補生なのか？そいつ」
そう聞くと織斑はおっ！っというような表情をして、また話を続けた。
「すげぇなキンジ、よくわかるな！あぁ、確かに来るのは中国の代表候補生らしいぞ？」
やっぱり。と心のなかで呟く。まぁ大体分かるか。そんな頭のよろしくない俺でもわかるぐらいだし。
言っちゃえば政府の手が加わらんと、んなこと無理だろ。
しかもここは、『ＩＳ学園』。つまり、ＩＳを扱う場所だ。
つまり、『女』で、『ＩＳ操縦者』で、『政府に干渉出来るほどの者』
――代表候補生だ。

「しっかしなぁ……」

俺が一人で心の中解説を行っていると織斑は椅子の後ろ足を少し浮かし、天を仰いだ。

「？どうした織斑。中国に嫌な思い出でもあるのか？」

俺は自分のなかに存在するらしい優しさという成分を少しだけ織り混ぜながら織斑にそう問い掛けた。

「いや……思い出って言えば思い出なんだが……ま、あり得ないか」

織斑は顎に手を当てて一人で考え込み、一人で自己完結した。

「あ、そう言えばさ、どうするんだ？」

織斑がまた、主語の抜けた会話を振ってくる。

「何が？」

きっとあまり重要性の無いことなんだろう、と思い軽く聞き流そうとするが、そうもいかなかった。

「来月のクラス対抗戦」

「……」

俺は思わず苦虫を噛み潰したかのような顔をする。

読んで字の如く、『クラス対抗戦』

これはクラスのトップが――つまり、クラス代表が他のクラスとＩＳで戦うリーグマッチだ。

本格的なＩＳ学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作るためにやるらしい。

そしてまた、クラス朝単位での交流及びクラスの団結の為のイベントだそうだ。

そして、やる気を出させるために勝った一位クラスには、優勝賞品として、学食デザートの半年フリーパスが配られる。

そして俺は、これのせいで厄介な事になった。

それは、

「フフ……ももまん食べ放題」

「ねーねーねーねー皆！お菓子食べ放題だって？なに食べたい？理子はね～パフェ食べたい！」

このバカ共のせいでな……！

そう、このバカ二人はこのフリーパスが欲しいがゆえに……！

◆◆◆

それは今日の俺の朝の第一声だった。

「うん。あんたには絶対勝って貰わなきゃならないからね。仮にも武偵校の生徒なんだし」

まぁ。言ってることは正しいのかもしれない。

だがなアリア。お前さっきうわ言で「フリーパス……ももまん食べ放題……」とか呟いてただろっ！

「アーリア♪んじゃあこの理子りんも手伝ってあげるよ♪」

そう言ってアリアに抱き付いたのは、理子。

勿論こいつの目的もフリーパスだろう。

何てったってこいつは大の甘党だからな。

すると理子がアリアに向かって何か耳打ちをし始めた。なんだ？

それを聞き終わるとアリアの顔が真っ赤になっていき！

「なっ！ん、んな訳無いでしょ！ばっ！馬鹿じゃにゃいのっ！！アタシは別にキンジと二人になりたくてやってる訳じゃないのっ！」

だったらそんな動揺するなよ。

「と、とにかくっ！今日からは放課後体育館ッ！遅れたら――」

そこまでいって瞬時にホルスターから例のブツを取りだし。

「風穴ッ！」

アリアの名言とも取れるこの言葉をいったのである。

◆◆◆

こんな他愛なくはない会話をしていたら周りには女子が寄ってきていた。

「遠山くん頑張ってね～」

「フリーパスの為にもね！」

「今のところ専用機を持ってるのは一組と四組だけだから、余裕だよ！」

やいのやいのと楽しそうな女子達の会話を盛り下げることなんてできるわけもなく、俺は一言だけ「おう」と言っておいた。

「――その情報、古いよ」

不意に、教室の入り口辺りから、声が聞こえた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、結構偉そうな態度をとる彼女。

彼女は一体――「鈴……？お前鈴か！？」ん？

隣を見ると織斑が……何て言えばいいんだ？

……そうだな。久しぶりに友達と会ったような顔をしている。

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす。ツインテールが軽く揺れ、ふわり、と女子特有の甘い香りがした。

「何格好つけてんだ？すげぇ似合わないぞ」

「んなっ……！何てこと言うのよ、アンタは！」

さっきとは打って変わり、きっとこっちが彼女の本性なのだろう。確かにあれは似合ってなかったし。

ところでなんだが……。

「あの……凰？歯を食い縛っといた方が良いぞ。結構頭にクるから」

「はぁ？何言ってんのよ？」

その言葉が、合図だった。

バシンッ！

嗚呼、無情に響くは出席簿の音。――鬼教官こと、織斑先生の登場である。

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさともどれ。そして入り口に立つな。邪魔だ」

「す、すみません」

さっきまでの威勢は何処へ。悲しきかな人間の習性。織斑先生には逆らうまい。と。

そしてすごすごとドアからどく凰。その態度はもう完全にビビってる状態だ。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！……それとそこのアンタ！」

指差されたのは、俺。

「なぜ？」

そしてその答えを聞くまでもなく織斑先生という驚異が凰を戻らせる。

そして、

「……一夏、今のは誰だ？やけに親しそうだったが」

こっちはこっちで大変そうだが。

バシンバシンバシンバシン！

織斑先生の出席簿が火を噴き、その他の女子も頭を叩かれる。

無論織斑を含めて。

とにかくまた、面倒事が増えそうな朝であった。

セカンド幼馴染み（後書き）

うーん何かまともな終わり方があまり浮かばない……。

そしていろいろと設定に無理があるこの小説。……どうしたもんかな。

まぁ矛盾点、感想、誤字脱字があればよろしくお願いします！

また次回でお会いしましょう！

傲慢な人間は（前書き）

ども、チキン執事でっす。

なんとも言えないものになりました。

では、どうぞ！

傲慢な人間は

「待ってたわよ、一夏！」

それは、ラーメンが鎮座しているお盆を持った少女が発した言葉だった。

ここは食堂。周りを見渡せばそこかしこに生徒が存在している。

でーん、と俺達の前に立ち塞がったのは今日の朝、転入してきたらしいやけに織斑と親しそうな、いや、朝のあの態度をみる限り実際に親しいのだろう。

彼女の特徴とも言えるツインテールが微かに揺れる。

ふと。ふとなんだが俺は一つの事実に気が付いた。

……凰、こいつ、アリアと軽くキャラ被ってないか……？

勝ち気なつり目。言わずもがな髪型。身長。

言いにくいのだが未発達な体（部分的な意味でも）

まぁ、これ以上追及するとあとで二人からの攻撃が来そうなので止めておこう。

「まぁ、とりあえずそこ退いてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。分かってるわよ」

織斑のそんな一言に凰は顔を赤くしてそう言った。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どう希望だよ、そりゃ……」

思ったんだが織斑の周りの女って特別個性が有るよな……え？お前が言うなだって…。ハハッ止めろよ。俺が頑張って目を反らしていた現実を言うないでほしい。

「あー、ゴホンゴホン！」

と、篠ノ之がわざとらしく咳をした。きっと嫌なのだろう。好きなやつが知らない女と話しているところをみるのが。

「向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

そんなことは露知らず。織斑は凰を連れ席に歩いていく。

さて、俺もなんか買おうかな。

織斑が買ったやつが旨そうだったな。そう思い、俺は学食の券を買おうと財布を取り出したときだった。

「き、キンちゃん！」

「……何だよ」

この呼び方で分かるように、彼女は白雪だ。

白雪が廊下から少しはや歩きで此方へ駆け寄ってくる。

手に紫色の包みを抱えて。

あれは……重箱か何かか？多分そうだろう。

そしてこれからいうことも———。

「き、キンちゃん？よかったら何だけどこれ、食べない？」

……やっぱりな。

まぁ、嬉しいことに変わりはない。

こいつの料理はやたらと旨いからな。

「あぁ、ありがとな。貰うよ」

俺は白雪の持っていた包みを受け取る。

すると白雪の顔がぱぁ、と明るくなり！

「え、えぇとそのっ！ありがとうございますキンちゃん様！」

出た、意味のわからん二重接尾辞。

「あ、あぁ。まぁ、行こうぜ」

俺は一抹の不安を覚えながら白雪と共に織斑達のところへ向かった。

着くとそこには織斑や凰、セシリアに始まり篠ノ之までもが同じテーブルに付いていた。

残りの席は……3つか。よし、俺と白雪は座れるな。

それを確認したあと、俺は織斑の隣についた。

あれ？そう言えばなんで織斑の横が空いてるんだ？

普通なら……あぁ。

理由は、すぐにわかった。

その理由とは、篠ノ之が『私は気まずくてそこに座れないけど誰か座ったら殺すぞ』という視線をガンガンこちらに送って来ていた。

俺が席に着くと、篠ノ之は安心したような顔になる。

つまりは座っていいんだな。

「そう言えばだが織斑と凰は仲良さげだが幼馴染みか何かか？」

「そうだ。お前らは一体どういう関係だ？まさか……つ、付き合っ

てる、のか？」

俺のあとに続くように篠ノ之が織斑に詰め寄る。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染みだよ」

「……」

「？何睨んでるんだ？」

「何でもないわよっ！」

うわっ……ＴＨＥ鈍感。唐変木な奴だな織斑は。

「幼馴染み……？」

その一言を怪訝な顔で織斑に箒は聞き返した。

「あー、えっとだな。箒が引っ越して行ったのが小四の終わりだっただろ？鈴が転校してきたのは小四の終わりだったから、ちょうど入れ違いだな。で、ほら。こっちが箒。前に話したろ？小学校からの幼馴染みで、俺の通ってた剣術道場の娘」

「ふーん、そうなんだ」

凰は篠ノ之をじろじろと見ている。そして篠ノ之も負けじと凰をじろじろと見ていた。

「始めまして、これから宜しくね」

「あぁ。こちらこそ」

そう言って挨拶を交わす二人の間には火花が飛び散っている。ように見える。

うん。どうやら織斑も俺と同じく見えているらしい。

さっきから目をしばしばしている。

「ところでさキンちゃん」

と、正面にいる白雪がそう話を振ってきた。

「ん？なんだ？」

俺は目の前にある食事に箸を伸ばしつつも白雪の問いにそう答えた。

「キンちゃんって今日アリアたちと訓練するの？」

カランっ……。

思わず手に持っていた漆で黒光りしてる箸をテーブルの上に落とす。

……忘れてた。

あぁ思い出したくもなかった。出来れば永遠にな。

「あぁ、そうだよ。……はぁ、面倒臭」

思わずため息が出る。
溜め息を吐くと幸せが逃げるというが俺には関係ない。
きっと俺には幸せなんて残ってないからな。
あれ？どうしてだ。泣きたくなってきたぞ。
独りでに感傷に浸っていると、そこに思わぬ乱入者が現れた。
「へぇー何、アンタ訓練するの？」
———凰だ、
「あ、あぁ」
凰はまるで俺の事を新しい玩具か何かを見たときの様に興味津々、
まさに好奇心に溢れた目をしていた。
「ねー。じゃあさじゃあさ放課後、模擬戦しない？」
そしてこんな発言をしましたとさ。
ってバカだろ……。これからどうせ戦う相手にそんなことすると思
ってるのか？
「む、無理だ。俺にはなんのメリットもないし……」
「ないし？」

「っ……！と、とにかく無理だっ！」

ふぅーん、と凰が此方から視線を、手元の飲み物へと変え――

「怖いんだ」

一言、そう言った。

怖い？ふざけんな。お前よりレキの方が百倍近く怖いわ。と言ってやろうと思っても、声がでない。

何故だ？

怖い？

違う。

じゃあなぜ？

それは――

内心、きっと俺は、『こいつら』の事を見下して居るから。

いや、違う。

似ているかもしれないが、違う。

見下して居るのではない。優越感を得ているのかもしれない。

元々こいつより戦闘経験、実力、判断がある自分に。

だから、『戦わなくても勝負は見えている』

そう、思っているのかもしれない。

駄目だ。こんな思考棄てなければ。

人間は貪欲だ。強くなれば成る程その貪欲さは大きくなる。

そしてそれは、いつか身を滅ぼすだろう。

――これはカナ。――いや、兄さんの教え。

俺はそんな風にはなりたくはない。

だから、

「確かに、怖いかもな」

それを聞いた凰がフッと口元を歪める。

「あーあ。なーんだ。一夏倒したって言ってたからもっと強いやつかと思ったら、」

「なんか興醒めね」

少しだけ、織斑が眉尻を歪める。今の発言を不服に感じてくれたんだろう。優しいな。

「いやー。怖いぜ。『そんな自分は凄いと思い込んでる輩の』発言はな」

その言葉を火蓋に、俺達が座っているテーブルの体感温度が一気に下がる。

「なん……ですって……！」

つり目がちな目をさらにつり上げてこっちをにらんでくる。

「そういう発言、行動控えた方が良いぞ？井の中の蛙大海を知らずってな。お前より凄い奴なんて五万といる。いや、実際見ててかなり痛々しいな」

その発言に遂にぶちギレたらしく、机をおもいっきり叩く。

「アンタ何言ってんの！？私の苦労も知らないくせになんで凄く無いなんて言えんのよ！？」

「はぁ？お前こそ何いってるんだ？俺はただ単に、『お前より凄い奴は沢山居る』と言っただけでお前が凄く無いなんて一言もいってないぞ」

そう、確かに凰は凄いと思う。

何故ならこいつは織斑と別れたのが中二の終わり、つまり一年近くでここまで這い上がったのだ。これを凄く無いなんて言えないだろう。

しかし、だ。

俺はお前より凄くてお前より強くてお前より苦労してきた人間なんて沢山見てきたんだよ。

例えば、

「神崎・H・アリア」

俺がボソッと出した名前に、凰が首をかしげる

「いたろ。あのピンク頭。あいつはな、元々、ロンドン武偵局に居て、そこで武偵活動やってたんだよ」

「その時のあいつ」

「犯人一人も逃したことないんだってよ」

「!?!?!?」

皆の顔が驚愕に染まる。

一応皆も軽く位だが武偵の事を理解しているようだ。

武偵活動とははっきりいうと警察じゃあ手のつけられないような仕事をこなす。

いい意味でも悪い意味でも。

例えば子猫の探索。そして、

凶悪な犯罪者、等だ。
アリアは基本的に強襲という、武偵のなかでも危険な作戦でいつも勝利を納めていた。
「で、なんでアリアがこんなことを続けているか分かるか？」
皆は顔を見合わせ、分からないといった感じのオーラを漂わせる。
「あいつはな、自分の母親を助けるためにやってんだよ」
「……」
「詳しくは言えないけどな。あいつの母親は凶悪な犯罪集団に嵌められて今刑務所にいるんだ。――有罪判決が出れば、死刑でな」
「あいつ、アリアはな、そうやってやってればいつかはそいつらにたどり着けると思ってそうやって来たんだよ。それに比べて、どうだ？お前は？これでもお前は自分の方が偉いとでも言えるのか？自己欲の為に力を手に入れ、自己欲の為にそれを奮う。楽しいだろうな。きっと。でもな、あいつには一日一日に命掛けてんだよ」
「そっ、そ、れ……は」
凰がおどおどしててとても歯切れが悪い。
「じゃっ、じゃあ！じゃあそういうアンタはどうなのよっ！それだけ偉そうなことといってるんだからっ！」
これは、きっと追い詰められた子供が言うような事。

弱く、儚い。まるで根拠も脈絡も。何でもない。詭弁だ。とでも言っておけば適当に済ませられただろう。

「偉い。とは確かに言えねぇよ。確かに俺は逃げ回っているよ。現実からも武偵からもな」

でもな、と俺は言葉を紡ぐ。

「皆、とは言わない。でも出来る範囲。手の届く距離の者なら」

「あの『力』を使ってでも守る」

そう遠くない過去。俺の決めた意志。

へっ、上等だ。こっちは代々強制的にヒーローやらされてるんだ。それぐらいどうってことない。

「……名前」

ボソッと。凰の口から言葉が漏れた。

「ん？」

「アンタの……名前」

うつ向きながら、そう言う凰。

あぁ、確かに、毎回アンタじゃ面倒くさいよな。

「俺は遠山、遠山キンジだ」

それをきくと彼女はいきり立ち空になったラーメンのどんぶりをお盆で持ち去っていった。

そして、

「あたしまだアンタの侮辱発言許して無いんだからね！覚悟しなさい！戦いの時はメッタメッタにしてやるから！覚えておきなさいよ！『遠山』！」

それだけいうと、凰は食堂を去っていった。

きっと悪い奴ではないんだろうな？

ただ少し、傲慢になりすぎただけであって。

次会うときはきっと戦いの場になるだろう。

それこそ、望んでいなかった展開に、嫌気が差す。

あーあ。どうしてこうなった。

問うても返してくれるものはなく、帰ってきたのは女子達の喧騒。

やっぱり、

俺に平和は訪れないらしい。

そう察知した俺は思考を放棄した。

まぁ、とにかく。

疲れた。

ついでに言ってしまうとあの凰の声で織斑先生が駆けつけ、出席簿で叩かれたのは余談である。

傲慢な人間は（後書き）

はぁ、キンジ無双が早く書きたい。

多分キンジ無双は次に、ようやく書けると思いますが、まぁ期待していてください！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6416x/

インフィニット・ストラトス～緋色の弾丸と白の騎士

2011年11月7日10時02分発行